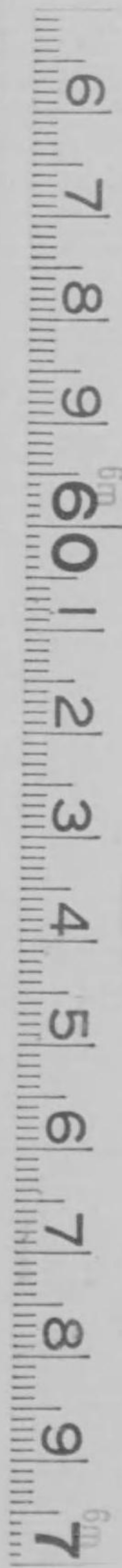


353

16



始



エト7G-72

353  
16

# 日本民族祖先の雄圖

(下)

(8)

日本民族  
研究叢書

木村鷹太郎 著

日本及び全世界　ハ々よ！  
 來つて日本民族神の雄圖を見よ。  
 其全世界の開拓、經營、教化は  
 眞に雄壯偉大、又た光榮あるものなり。  
 諸君の教へられたる舊來の日本歴史  
 は――壓縮、削殺したる偽作歴史――  
 盡く諸君を欺けるものなるぞ！

379-15  
353-16

### 日本民族祖先の雄圖(下)目次

#### 第二部

- 二十 へリオポリスの忍名別。景行天皇……………一
- 二十一 日本武尊の亞細亞全土の平定……………二
- 二十二 日本古典のアレキサンドル記事……………三
- 二十三 アレキサンドル大王は天照大御神の崇拜者——崇神天皇はアレキサンドル大王の名付親……………四
- 二十四 經度緯度の創始……………五
- 二十五 阿弗利加の經營……………九
- 二十六 シンゴイイズムの起原——神功皇后……………三
- 二十七 應神天皇の埃及艦隊編成……………三
- 二十八 仁德天皇のスエヅ運河開堀……………三
- 二十九 スエヅに仁德神宮を建設せよ……………四
- 三十 日本民族の亞細亞東漸……………五

大正 7  
8. 4. 16  
内交

#### 序文

現時の日本人は民族的墮落をして居る。學問知見は狹隘に、抱負は痿縮し、元氣は消沈して居る。然るに吾等太古の祖先等は、雄圖實に四海を蔽ひ、世界の探検開拓に於て、學問に於て、教化に於て、——一切の善美に於て——全世界の先導者であつたとは、内外の歴史も古典も明瞭に記載して居る。然るに長年月の間に民族地理に移動があり、其れに伴うて歴史の無學が生じたに因つてか、或は爲政者一時の小政策に因つてか、此世界大の民族歴史は、極東小島國の歴史に壓搾、削殺偽作せられ現時の歴史家等も少しも其れに心付かず、日本民族なるものは、世界に對して何等能動的光施的の事物なく、極東の小さい離れ島に、蠢々たる蛆虫の如く建國以來幾千年を只だ受動的に過ごして來た者かの如く思はせ、之れが爲めに日本人の精神を痿縮せしめ、世界史上に、又た國際關係上に自ら肩身を狭くせしめたとは甚しいと謂はねばならぬ。そして學者も爲政者も恬として其れに安んじて居るに至つては沙汰の限り。祖先に對する不敬不孝の極。要するに是皆歴史家の無學、國學者無知の罪である。吾等新史學者等は、此に正堅博大なる學術的研究に據り、本論に於て日本歴史の真相を發揮し、吾民族祖先の光榮偉大なる歴史を説き、内は日本人同胞に自覺。與へ、併せて世界的大感を興さしめ、外は萬國をして吾等の祖先の功績に對し、又此歴史と、此歴史を有する民族とに對して、正當の感謝と尊敬とを拂はしめる爲めに、此研究論文を發表する。

三十一 太古日本民族の全世界踏破……………二六

三十二 中米ニカラガ運河計畫と中臣氏……………二七

三十三 ニカラガに中臣氏の紀念神殿を建設せよ……………二八

三十四 『亞米利加』の名稱は天ノ富ノ命に出づ……………二八

三十五 列國治者の諸名稱と其格式……………三〇

三十六 列國治者の格式を論定す。其一。西洋諸國……………三三

三十七 其二。東洋諸國……………三五

三十八 日本帝國の格式……………三七

三十九 日本は世界諸宗教の宗源……………四〇

四十 神道を世界教に還原するを要す……………四四

四十一 人類福祉上日本の功績……………四六

四十二 世界人類に關する學問上の中心——日本……………四九

四十三 結論……………五一

# 日本民族祖先の雄圖 (下)

木村 鷹 太 郎

## 第二部

### 二〇 ヘリオポリスの忍呂別・景行天皇

垂仁の次帝——日本年表は採用出来ぬ——地理上の順序と見れば善い、乃ち埃及の北から南の方にナイル河を溯る順序——忍呂別・景行天皇は纏向の日代の宮に都し給うたが、之れは埃及のヘリオポリス(日の代 Helio-polis)の事である。此天皇の皇化は國典に據れば、實に當時の全世界を覆育するもので、古事記雄略記中の三重の采女の歌は最も簡單に、而も美しく其事を詠んで居る其歌は

纏向の日代の宮は 朝日の日照る宮  
 夕日の日かける宮 竹の根の根足る宮

木の根の根はふ宮

まきさく櫛の御門

新嘗屋に生ひたてる

ほづえは天を覆へり

しづ枝は鄙を覆へり

ほづえの枝のうら葉は

中つ枝の枝のうら葉は

下づ枝の枝のうら葉は

捧がせる瑞玉盃に

水こをろくくに

高光る日の御子

やほによしいきづきの宮

百枝櫛が枝は

中つ枝は東を覆へり

中つ枝に落ちうらばへ

下つ枝に落ちうらばへ

ありぎぬの三重の子が

浮きし脂落ちなづさひ

こしもあやにかしこし

事の語り事もこなば。

即ち此の天皇の勢力は上は天即ち小亞細亞アルメニヤから東は全亞細亞の「あづま」を覆ひ、下づ枝は鄙即ち歐羅巴を覆ひ、其下枝の落葉は阿弗利加に及ぶのである。阿弗利加とは語源 *Aphra* 即ち「脂」であり、別名をリビヤと云ひ、「落ち」を意味し、「落ちし脂」の歌の句となる。日代の宮の歌の真正の解釋は是れであるが、日本人は果して此れを知つて居るか。國學者も神主等も、教育家等も、又た廟堂の政治家等も果して之を知つて居る者があるか。日本人は祖先の是等の事業

を知らぬ以上は決して世界的に大きくなれず、小成に安ずる心は直ぐ起らざるを得ない。

此百枝櫛樹の事はスカンヂナヰヤの經典エツダにも、昔大きな力強いイグドラシルの秦皮樹が有つて、其一つ目の根は神の國アスガルドに擴がり、二つ目の根はイオツンハイムに擴がり、三つ目の根はニツフルハイムに擴がつて居たとある。そして「力強い秦皮樹」とは百枝・櫛・樹(語源 *Eik-dyr-ash-d*)と對譯せられ、アスガルドの神の國とは天であり、イオツンハイムは東であり、ニツフルハイムは鄙であつて、二つの古典記事は一つ物を傳へて居るので、たゞ古事記は樹の枝と云ひ、エツダは根と云ふの相違があるに過ぎぬ。

### 二二 日本武尊の亞細亞(あづま)全土の平定

景行天皇の太子日本武尊の東夷鎮定は、日代の宮即ち埃及のヘリオポリスから出立して亞細亞全土を巡回し給うたので、其途順は埃及から亞拉比亞西岸を南下し、アテナイ神宮のあるアデンに立寄り、こゝに天照大神の宮を拜し、東南岸を傳うて波斯灣の入口オルムズ海峡で橘姫の入水事件があり、其れが盡く其地方の地名となつて居る。其れからザグロス山から東南を眺めて橘姫の追憶がある。其東南を眺めることがザグロス山の別名 *Chio-athras* 山の名になつて居る。——『小碓眺める』を意味する。其れから蓋アレキサンドルの遠征と同じ途でソグデアナ(尾張)に行

き宮實姫みやすひめ關係があり、其れから印度河を下り、船で緬甸へ行き、之れを陸奥蝦夷の境と云ひ、其れから印度北部へ入り込んで、西の方へ路を取つて歸り途に就き、新治にいばり(ニーバル)筑波つくは(アボコバ)を過ぎ德里てりに着き給ふた。德里とは舊名インダバラ、又たマハーバラタで、大尾を意味し、之れが甲斐の酒折さかき(榮へ終り)の宮である。其れから信濃の阪の神退治とは西藏西部のサカであり、『大御酒杯を捧げた』尾張の宮實姫みやすひめの土地はソグディアナのオークシアルテスである。此女性はアレキサンドル大王傳にはロキサナ(不淨、月經)姫となつて出て居る。其れから近江の伊吹山とはカスミルのヒマラヤ山の事である。其所からアフガニスタンに出て、バルキスタンの海岸に南下し、再び前来た途を取つて亞拉比亞西海岸を北に上り、ナバ野なば即ち能褒野のうで薨じ給うたのである。猶太教のモーゼの死んだのも此地方と云うてあるが、日本武尊の薨去の時の記事とモーゼの死んだ時の記事とは甚だ一致して居る。且つ日本武尊は希臘神話のアポロンの趣があり、アポロンはムーズ(ムーゼ)の首領で、モーゼとムーズ(ムーゼ)とは同語である所を見ると、日本武尊とモーゼとは同一人を別々に傳へた事が察せられる。

日本武尊は比較研究上又地理上世界的に偉大であるが、之を舊派史學のやうに現島國日本の東海道や、東山道の狭少な土地で働いた人物など、解するは、此偉大な皇子に對する大不敬である。且つ景行天皇及び日本武尊の主義は「美しい言葉を以つて人々を教へ、其れでも聽かねば兵を

擧げて之を撃つ」と云うにあつて、後世マホメット教が「左手に經こころ右手に劍」と云うのは全く日本武尊の主義を傳へたものに過ぎぬ。景行天皇の筑紫巡狩とは希臘の巡狩であり、日本武尊の熊襲征伐も亦希臘のラツコニカ及びメツセニヤの征服であつたことは新研究の明瞭にし得る所である。

前にも云うた如く日代宮の忍呂しのろ・別天皇わかはヘリオポリスのオシリシリス(オシリ・イス Oshiris = Osiris)の神と同じ人物であるが、其事業も亦同じで、忍呂別天皇は日本武尊に勅して「願くば深謀遠慮、姦を探り變を伺うて、之に示すに威を以つてし、之を懐くるに徳を以つてし、兵甲を煩はさずして、自ら臣順せしめよ。即ち巧言以て暴神を調へ、武を振て姦鬼を懐へ」と。日本武尊奉答して曰く「今神祇の靈に頼り、天皇の威を借りて、往いて其境に臨み、示すに徳教を以つてせん、猶服せざることあらば兵を擧げて之を撃たん」と、オシリスの神も、埃及神話に據れば亦大軍を率ゐて全世界を周り給うたが、到る所に農耕の事を教へなどし、武力を用ゆる事は極めて稀で、世界の人々は其混言に引き付けられ、又歌舞の面白さに誘はれて其徳に懐いたとの事である。前にも言うた如く日本武尊は「ミューズ」であるからして、父子一體と見て忍呂別天皇も音楽歌舞の感化力を用ひ給ふたことは十分に察せられる。此オシリス即ち忍呂別天皇の降誕し給うた時は、人々は喜んで「世界の統治者生れ給うた、萬物の主生れ給うた」との福音が傳はつたとの事

である。又た此天皇は猶太民族を教化して其國を建てしめ玉うた事の歴史もある。成務天皇が忍呂別天皇を頌賛し玉う詔勅に「大足彦天皇聰明神武、籙に膺り、圖を受け玉へり。天を治め人に順ひ、賊を撲ひ正に反へし、徳覆燾に伴しく、道造化に協へり。是を以つて普天率土王臣たらざるなく、稟氣懷靈何んか處を得ざらん」とあるは、日本書紀と埃及歴史と全く同じ事を謂うもので、此天皇の世界的偉大な事が證明せられる。

又た比較研究面白い事は、埃及傳説に據ると、オシリス即ち忍呂別天皇には悪弟チフォーンなる者が反逆を企て、或宴會の席上美しく見事に裝飾した箱を持つて來て、來賓一同に向つて「此箱の中には入つて、其身の丈が箱の長と同じ人に、此美しい箱を進呈する」と云ひ、來賓には一人も合格者無かつたがオシリスのみは合格し、其箱には入るや否や、反逆者は箱の蓋を締め、釘付けにして、之れをナイル河に流して、オシリスを殺したとの事である（此事は著者の郷里宇和島の俗謠にもある）が「籙に膺り、圖を受け玉へり」と云うてある。籙は箱であり、圖とは河圖のことでナイル河を謂うたものである。素より埃及傳説と、日本書紀の云う所の箱と河との思想は同じもので、同一事件の別傳と考へられる。

忍呂別天皇や、日本武尊の事業は世界的である。決して舊來史家の思うが如き、極東小島國內の内治問題や、内亂鎮定問題の如き小事件でなく、天下を以つて意とし玉うたのである。而も世界の平和と教化とが第一の目的であつた。

### 二二 日本古典のアレキサンドル記事

日本の古典には前に云うた如く、希臘、マケドニヤ、埃及關係や、プロレミイのアレキサンドル文明の事が有り／＼と出て居るに關はらず、世界史上の大事事件たる、又た東洋文化の有功者たるアレキサンドル大王の埃及へ來たことや、其東征の事が見えぬやうなは何故であらうか。吾輩は未だアレキサンドル傳を全部抹殺する勇氣はないが、多大の疑問はある。埃及のアレキサンドル府は此大王の創建し命名した所と謂うてあるが、此地名は實は彼れよりも前に存在し、日本の書物にもあり、支那太古史（今の支那でなく、太古埃及の事）の舜の傳中にも既に「歷山」とある。然らば此點に於ても既に舊來のアレキサンドル傳の重要な一角が打壞されて居る。彼の勇壯果斷、天翔る概あるは我日本武尊と同じである。彼れの印度に於けるロキサナ姫は日本武尊の尾張の宮寶姫と同じ意味の名稱であり、彼女との結婚や、大將達の其れに反對したことなども同じであり、兩人遠征の途も甚だ同じものがある。（日本武尊の方が廣大）

又た日本武なる名稱の語源を研究すると、日本は前に謂うた如く「ヘレーニス」（希臘）と同じ意味であり、武（タケ、タケル）は羅典語 Pace, Dece, Duc, Ducare で教導、美成を意味し、ヤマト、

ダケルは『日本化』又た『希臘化』を意味し、日本希臘的に世界を誘導教化するの意味となり、Hellenization 即ち Iamatoization が日本武尊の御名であり、アレキサンドルの事業であり、兩者同じものである。又た Dace, Dacee は美成を意味する點に於てアレクサンドルの名の中心語 *Δακε* と同語で——一は羅典語、他は希臘語たるの相違のみである。

前に言うた本牟知別王に關した山部大鷲の『鳥取り』遠征の地理は全然アレキサンドル遠征の路と同一である。そして『鳥取』は『ブトレミイ』のことで、ブトレミイはアレキサンドル部下の大將の一人の名である。又た本牟知別とは *Pontikage* で『凡て若く美しく』を意味し、アレキサンドルも *Alexy-sadder* 『凡て若く美しく』を意味して、本牟知別王と鳥取氏關係は、アレキサンドルとブトレミイ關係と同じものであり、日本の書物には神秘に書いてあり、希臘には明瞭な歴史として書いてあるの相違に過ぎぬ。

是より前日本には四道將軍が全世界に派遣され、其東に向つたものはアレキサンドル王の遠征地と同じであり、又た倭姫の旅行も大體同じものであることは新研究の證明し得る所である。

又た西に於てアレキサンドルの本國方面の事に關しては、前に言うた神武天皇の腋上の噉丘や、懿德天皇から開化天皇に至る間、及び雄略天皇の土地は秋津島大和で、ダニューブ河及びカルバトス山地方であり、カルバトスも噉 (*Poma*) も美容、容儀修成を意味し、之れを葛城と云ひ、之れ

がアレキサンドルと同意味である (*Castrage = Alexander*)。日本で『葛城』は『アレキサンドル』の譯例となつて居る。又た是等地方一帯を昔は *Dacia* と云うたが、之れは *Dace, Dacee* で日本武——のダケルと同語であり、西史にアレキサンドル大王がトラケーやイルリヤを征伏したとある其の土地が、日本史に言うてある前述の土地で、四道將軍の行た北道——クルカとは此方角であるのも、亦アレキサンドル傳の要素となつて居るやうである。

古事記雄略天皇記には、葛城山の神は一言主と謂ひ、『善き事も一言、悪しき事も一言』一言裁斷勇往邁進の神で、雄略天皇は其化身のやうであるが、アレキサンドル即ち葛城王及び日本武尊の性質も亦全く其れと同じである。雄略の御名は其性質に考へて *Rulic = Rulc* 即ち標準一言裁斷——の發音と思はれる。此一言主神の地はバルカン山古代名ハイモス山である。

日本武尊の熊襲征伐とは南希臘のラッコニカの征服であり、景行天皇の筑紫巡狩とは希臘全土の巡狩であり、之れも亦アレキサンドルが征服した土地である。

又たアレキサンドルの本國マケドニヤは崇神天皇・御間城入彦の名を負うたものであり、又た『間城』*Maika* なる語も『お作りする』『若かく美しくする』を意味すること『アレキサンドル』と同じであり、又た崇神天皇の都磯城とはアレキサンドリヤである等に考へると、是れにもアレキサンドル傳の一部が存在して居ると察することが出来る。(然し崇神天皇の始の地は北希臘のニベ



イロスのテスプロチヤ (Thesprotia) 即ち「崇神」を意味する土地である。して見ると日本古典には一人のアレキサンドル傳としては無いが。(一)バルカン諸國は神武天皇以後諸帝の舊國であつたと云うこと。(二)御間城天皇の希臘から埃及遷都。(三)御間城天皇の名稱關係。(四)四道將軍の遠征。(五)蘇那葛智の來朝。(六)鳥取氏の東方遠征。(七)倭姫の東方大旅行。(八)日本武尊の東征。(九)アレキサンドルの天照アテナ女神崇敬(後に説く)等の事を総合して考へると、是等は明かに「アレキサンドルの事業」と稱すべきである。

此に於て日本古典にもアレキサンドル傳の要素となるべき事件が十分にあると云うても善く、又た西洋のアレキサンドル傳は何處まで信じて善いかの疑問が無いでもない。或は是等世界を日本化、希臘化即ち Hellenization 或は Hellenization の種々の運動や事業を一個の人物として小説的に構み立てたものが西史のアレキサンドル傳となつたではなからうか。此くの如き例は度々あることとて、日本でも此例はある。此事は研究上愉快な大問題として宿題にして置くことにする。

### 一三三

#### アレキサンドルは天照大御神の崇拜者

#### 崇神天皇はアレキサンドルの名付け親

「埃及日本」崇拜の、マケドニヤのアレキサンドル大王は、眞正の歴史上果して如何なる存在の

人物であつたかは不問にして置くも、彼れはアテナ女神即ち天照大御神の崇拜者であつたことは西洋史にも明言してある。

笠縫邑はリビヤ沙漠のアムモン神社——崇神天皇も亦天照大御神の崇敬者で、即位の六年倭の笠縫邑に就いて殊に天照大御神の磯城の神籬を立て玉うた。倭の笠縫邑とは勿論從來の日本の歴史家は誰も明瞭に爲し得ぬ。所が新研究上之れは埃及西方リビヤ沙漠中のアムモンの宮の事で、アレキサンドル大王が千辛萬苦を以つて参詣した其宮である。

アレキサンドルは埃及へ来て、アムモンの神社に参詣するとが日頃の宿願であつた。アムモンの使番は鳥である。彼れが沙漠へ踏み込んで途を失うた時に鳥の群が来て彼れを導いたと云うてある。吾等も鳥の導に由つて研究を進めよう。鳥を希臘語 *Καρναξ* (Carnax) と云ひ、「笠縫」を意味する。鳥の別名 *Καρναξ* で羅典語之れも「笠縫」である。此笠縫即ち鳥がアムモン神社に彼を導いたと云うは、此神社が笠縫の神宮地であることを暗示して居る。然し尙ほ進んで研究すると此アムモンを *Ammon Jupiter* と云うが、これが又た明瞭に笠縫を意味して、何の異論もない事である。且つ鳥を支那では神鳥と云うこともあり、梵語では菟尼とも云ひ、希臘語 *Souni* でアテナ天照女神の別名である。

アムモン神社の神體は神鏡——此アムモン神社の神體は黄金製の船形に、圓形の杯が載せて

あるとアレキサンドル傳の中に言うてあるが、之れが天照大神の御神體で、八咫の御鏡の現に日本の内侍所にあるものと同じである乃ち御舟代の中に御樋代なる圓筒があり、其内に高さ一尺三寸直径九寸の黄金の鐘があり、又其中に神體が座しますので、之れは『日本書紀通釋』が明治六年宮中で實見した所を書いて居ることである。此日本の神鏡の此眞形を知り居る者は歴史家にも始どなく、皆平面鏡と云うて居る。然し近松は知つて居る『唐船今國姓爺』に『内侍所の御鏡は三足兩耳の鼎と承る』と云うて居る。此神鏡(即ち酒杯)を入咫の鏡と謂ひ、又た鳥に入咫鳥なるものがあり、アレキサンドルのアムモン神社に鳥が導いたとあるも、『八咫』關係があることが察せられる。八咫とは語源 *Adra* で『若く美しく』すると、アレキサンドルと同意義である。

崇神天皇は歷山大王の名付け親——殊にアレキサンドルはアムモン神社に參詣して、祭司に頼んで『アムモンの子』と云ふ名稱を頂戴して、非常に名譽として喜んだことがある。之れは崇神天皇が任那の蘇那・葛智に天皇の御名『間城』を與へ玉うて其國名がマケドニヤとなつたことの別傳と思はれる。且つ蘇那・葛智は *Sona Chalchis* で、英語で云はば *Son of Chalchis* 『杯の子』を意味するが、アレキサンドルの參拜したアムモンの神體は杯で、彼れが『アムモンの子』と呼んで貰らうたのは『杯の子』であり、又た彼れの本國マケドニヤの首府を *Pella* と謂ひ、酒杯を意味する。彼れは、時のアムモンの祭司たる崇神天皇の足下に膝いて其名稱を戴いた、此拔山蓋世の英

雄アレキサンドルは崇神天皇の名付け子である。

アレキサンドルは此神社で神託を受けて、其れから東征に行くのであるが、崇神天皇の時に在つても『倭の笠縫に就て、殊に礮城の神籬(紀念碑)を立つ』と云うてあり、終夜享樂して、然る後大神の教に従ひ豊鋤入姫が諸所に大宮處を求め玉うとあつて、アレキサンドルの場合と同じである。又た前に云うた如く『礮城』とは『アレキサンドル』の別語であるから、此笠縫の宮にもアレキサンドルの神籬即ち紀念碑のあることは明瞭である。天照大神の御鎮座運動の地理は多少は異うが、大體又たアレキサンドル東征地理と同じで、埃及からシナイ半島、シリヤ、バビロニヤ、オーマン、メヂヤ、アフガニスタン、印度方面へ行き、其れからバビロニヤ、アススリヤへ歸着し玉ふのである。特に豊鋤入姫、後に代つて倭姫が女性の身を以つて天照大神を奉戴して亞細亞大陸の大遠征を試み、日本の皇化を宣傳し玉ふ如き、當時日本の活動は實に壯烈と謂はねばならぬ。

歷山王は天照大神の崇拜者——アレキサンドル王はアムモン即ち笠縫神宮參詣から東方へ出發し、陣中でも幾度となく天照アテナ女神の祭禮を行つたとは西史の云う所である。世界を巻席せうとする者は、當然世界統一の神天照御大神を尊崇する。日本武尊も亦天照大神の庇陰を被つた者である。

此く研究を進めると、アレキサンドルは吾太古日本の征東將軍の一人であつたとの結論が出る。

#### 二四 經度緯度の創始

吾等地圖や地理を扱う時には經度、緯度を謂う者であるが、其れは西洋では如何なる起原を有し、何人が始めたと云うて居るかは知らぬが、此事が日本古典には明瞭に出て居ることは、余の新研究の發見する所——日本書紀の成務天皇紀に出て居るのである。

景行天皇の次帝、成務天皇・若足彦命は志賀の高穴穗(Aridio)の宮に都し玉うたが、之れは北緯約二十四度の埃及のナイル河に沿うた昔のヒエラシカミノス(Hiera Sycamino)で、高志賀・穴穗と譯せられる。

此天皇は大に天下國家の整理を意とし玉ひ、國郡に造長を立て、縣邑に稻置を置き玉うた。又た地理の事に意を用ひ、山河を隔して國縣を分ち、阡陌に隨うて邑里を定めなどし玉うた。特に東西を以つて日の縦とし、南北を日の横と爲し玉うたことは、地理學上最も注意すべきことで、後世學術的地理學の經度、緯度の起原は此にあり——其Longitudeは日の經の譯、Latitudeは日の緯の譯である。

此く「系統、整理するの智識と事業」とを雜典語Sciam(Scio)と謂ひ、「成務」天皇の號は此シヤム

がジャウムとなつたものと考へられ、「成務」の意味亦此内に存して居る。又た其都たる志賀高穴穗の「志賀」はScia(Syca)でシヤムと同語幹に出たものである。

#### 二五 阿弗利加の經營

『足』王家の阿弗利加——日本武尊は東征の事終つて、本國埃及に歸り玉う前、伊勢の能褒野、即ちアラビヤのナバ野(Naburru)で薨去し玉うた。然し其魂たる白鳥は墓から出て諸方へ飛んで行たとのこと。——是れは舊約書モーゼスの死の時と同じ記事。又た其葬式の歌は北は埃及デルタから南はモザムビックまでが詠み込んである。乃ち歌の中なる「なづきの田のいながら」(出雲風土記の惱の磯)はデルタのロセッタのことである。『あさじぬ原』は埃及南方アサジャのこと。『こしなづむ』はコシ(Cus)の國一名エチオピアのこと。『海家行けば』はモザムビックのこと。『大かはらのえ草』とは中部阿弗利加のガラ(Gala)の國を云うたもので、舊來の解釋の如きは取るに足らぬ。

日本武尊は『足らし』王家で、父景行天皇は大足彦。忍呂別命と云ひ、成務天皇は若足彦と云ひ仲哀天皇は足中彦命と云ひ、神功皇后は息長足姫命と云うが『足し』の語源「Tarsis」とはナイル河の事である。ナイル河を神話名でエーリ・ダヌス河と云ふ所から考へて、其語源に溯つて研究す

此く研究を進めると、アレキサンドルは吾太古日本の征東將軍の一人であつたとの結論が出る。

#### 二四 經度緯度の創始

吾等地圖や地理を扱う時には經度、緯度を謂う者であるが、其れは西洋では如何なる起原を有し、何人が始めたと云うて居るかは知らぬが、此事が日本古典には明瞭に出て居ることは、余の新研究の發見する所——日本書紀の成務天皇紀に出て居るのである。

景行天皇の次帝、成務天皇・若足彥命は志賀の高穴穗(Ara-Dio)の宮に都し玉うたが、之れは北緯約二十四度の埃及のナイル河に沿うた昔のヒエラシカミノス(Hiera Sycamnos)で、高・志賀・穴穗と譯せられる。

此天皇は大に天下國家の整理を意とし玉ひ、國郡に造長を立て、縣邑に稻置を置き玉うた。又た地理の事に意を用ひ、山河を隔して國縣を分ち、阡陌に隨うて邑里を定めなどし玉うた。特に東西を以つて日の縦とし、南北を日の横と爲し玉うたことは、地理學上最も注意すべきことで、後世學術的地理學の經度、緯度の起原は此にあり——其 Longitude は日の經の譯、Latitude は日の緯の譯である。

此く「系統、整理するの智識と事業」とを羅典語 Sciam(Scio)と謂ひ、「成務」天皇の號は此シヤム

がシヤウムとなつたものと考へられ、「成務」の意味亦此内に存して居る。又た其都たる志賀高穴穗の「志賀」は Scia(Sycam)でシヤムと同語幹に出たものである。

#### 二五 阿弗利加の經營

『足』王家の阿弗利加——日本武尊は東征の事終つて、本國埃及に歸り玉う前、伊勢の能褒野、即ちアラビヤのナバ野(Nabathin)で薨去し玉うた。然し其魂たる白鳥は墓から出て諸方へ飛んで行つたとのこと。——是れは舊約書モーゼスの死の時と同じ記事。又た其葬式の歌は北は埃及デルタから南はモザムビックまでが詠み込んである。乃ち歌の中なる「なづきの田のいながら」(出雲風土記の惱の磯)はデルタのロセッタのことである。『あさじの原』は埃及南方アサジャのこと。『こしなづむ』はコシ(Cos)の國一名エチオピアのこと。『海家行けば』はモザムビックのこと。『大かほらのうえ草』とは中部阿弗利加のカーラ(Cala)の國を云うたもので、舊來の解釋の如きは取るに足らぬ。

日本武尊は『足らし』王家で、父景行天皇は大足彥・忍呂別命と云ひ、成務天皇は若足彥と云ひ仲哀天皇は足中彥命と云ひ、神功皇后は息長足姫命と云うが『足し』の語源「Tarsis」とはナイル河の事である。ナイル河を神話名でエーリ・ダノス河と云ふ所から考へて、其語源に溯つて研究す

ると、ナイル河本發音ネイロス河の二つの名稱たる *Ne-Ilac*, *Eri-danos*, *Tarasssi* は皆同じ意味を運ぶもので、西洋語源學者はナイル河とは何を意味するかも知らず、甚しいはエーリ・ダノス河とは何れの河かも知らず、或は伊太利のポー河と云ひ、或は獨逸のライン河など云うて居る。笑う可きの極。見よ、エリダノス星座の圖を——明瞭にナイル河の流れの地圖ではないか。此星座圖とナイル河の地圖とは西洋幾千萬の學者が、幾百年となく見て居る筈、そして其れがナイル河であることを知らぬと云う彼等の頭腦は、吾等尊敬することが出来ぬ。エーリ・ダノス河はポー河でも、ライン河でもないことを世界の學界に教へて置く。そしてネイロスの「イロス」と、エーリ・ダノスの「ダノス」と「タラシ」(足)とは皆同じ希臘語の別譯で、「上登、上げる、惠與、恩賚」等を意味する名稱である。

其景行天皇・大足彦命はナイル下流デルタ即ち大成を意味する部分の名であり、成務天皇、若足彦命は其南部ナイル中流で、ナイル或はエーリダノスは「若足」を意味する。仲哀天皇・足中彦命はアビシシニヤ(Abyssinia/A-byssio-in)である。仲哀天皇の皇后即ち息長足姫命は又其の南方スダン及びカルツームの地で、スダンは羅典語の *Sudun* で「日」に當り、又た此地方を *カシ* 或は *カシ* と云うは「日」即ち「晴れたる高天」の事で、古代此地一帯をエチオピア(大日、天照)と云うたは此名稱の語源を證明するものである。カルツーム(Khartum)とは優美女神カリテース(Kharites)の

名稱の語尾の少變化で、天照、大日の美、神功皇后の美等の形容に基づいたものである。此優美女神には三體あつて、其中の一つをヨウフロシネと謂ふが、之れが即ち「息長」を意味し、カルツーム地方のナイル河を「息長足」と謂うのである。

さらば忍呂別・景行天皇は埃及北部ヘリオポリスの日代宮に都し玉ひ、若足彦・成務天皇は其南方一帯で、ヒエラ・シカミノスの志賀の高穴穗の宮に都し玉ひ、足中彦・仲哀天皇の土地はスダン、カルツーム、アビシシニヤ等である。日本武尊の白鳥の靈は尙はナイルの源頭より南に進み、グクトリヤ湖、タンガニイカ湖、ニヤサ湖を連ねてモザムビックまで飛んで行て居る。足王代の阿弗利加及び全世界の經營は實に雄大なものである。

且つナイル河上流地に太古大文明が有つた事は、前述カルツーム地方から、近世になつて、地下深き所から、古代の堂々たる大建築を發掘する事に由つても知ることが出来る。そして其等は日本古典にある諸帝王及び吾民族の遺跡と考へられる。

「足」の名を負うた天皇に孝安天皇の大倭足彦國押人命があるが、此「足」は埃及でなくバルカンのダニユーブ地方を謂うたもので、ダニユーブの語源は Doneo-via で、其「ドネオ」はナイル河の別名、エーリ・ダノスのダノスの羅典形の語で、「タラシ」と同じ意味である。

此希臘語 *Tarasssi* の語幹は *Taro* で、日本語「太郎」の語源のやうである。されば大足彦命は

埃及太郎、若足彦命は埃及次郎、ダニユーブ河系統の孝安天皇はバルカン太郎と謂うべく、現日本利根河はDone(Doneo)河で、ダニユーブ河や、エーリ・ダノス河と語源を同うし、又たタラシ即ち『太郎』河として坂東太郎の別名がある點も同じである。

日本古文學の阿弗利加記事——日本民族は太古阿弗利加には非常に親密な關係があつて、太古阿弗利加をエチオピア即ち大日の國、天照の國と謂ひ、又グライケ(希臘)即ち美の國と謂うた。日本の謠曲には阿弗利加ものが非常に澤山ある。『安宅』は北埃及の月の都たるメンフィスカら、南阿弗利加のナタル即ち能登まで『大江山』はスダンを東岸から西岸まで貫き、『黒塚』は東阿弗利加のモザンビクからコンゴ、西南阿弗利加一帯を含み、『護法』は阿弗利加南端一帯、『善知鳥』はアビスシニヤ、『藤』はアビスシニヤから并クトリヤ湖迄、『竹生島』は并クトリヤ湖、『白鬚』はマダガスカルで、俊寛の流されたのも此の島の東のマウリチス島である。小説『御曾子島渡り』にはコンゴから以北セネガルのことである。源平時代の平の維盛の礪並山敗軍はコンゴとエチオピア界のコロモリ山の名に存し、燈合戦は并クトリヤ湖から其西の湖水を含んで居る。又た神武天皇の出發點西偏の地とはセネガルであることは前に一言して置いた。——日本民族と阿弗利加とは非常に親密な關係があつて、西洋人等が此百年以内に僅かに阿弗利加の探險などを始めたが、日本の諸文學には幾千年の久しい以前阿弗利加内地のことを記したものが澤山あることを一言世界の學界に報告して置く。

### 二六 『ジンゴイイズム』の起原——神功皇后

ジンゴイ皇后——景行天皇から應神天皇に至るの間は、日本民族は埃及、ヌビヤ、アビスシニヤ等を中心として東西兩洋に其皇化を及ぼして居たもので、特に仲哀天皇、應神天皇、神功皇后の如きは西洋の北人の崇拜する所のトーラ、フージン、ジンゴイ又たフリヤ等武勇の神で、神功皇后の武勇主義は現今の西洋でも『ジンゴイイズム』なる畏ろしい好戦主義の別名となつて居る程である。そして西洋人は其ジンゴイなる主體は日本民族太古の女帝であつたことなどは夢にも知らぬ。西洋人が知らぬはまたしも、日本人が其れを知らぬと云うに至つては沙汰の限りである。此三帝の名は曆學にまでも勢力が有つて、七曜中の名になつて居る、即ち——

應神の日	Odin's Day(Wednesday)	水曜日
仲哀(仲哀)の日	Thor's Day(Thursday)	木曜日
フリヤ(神功)の日	Fria's Day(Friday)	金曜日

は其れである。神功女帝は必賞必罰の正義の女神、天照大御神の分身、勝軍の神で、西洋人が金曜日を一種の恐ろしい日として居るのは此女帝の日だからである。舊約書にクシ或はカシ(Cush, cas)

の女王とあるは樞日女皇即ち神功皇后の事である。此神功の日は金曜日、即ち *Frōya* (Friday) の日であることは——神功皇后には名劍があつて「此太刀自然と抜け出で、ひらり〜と切立て〜」(近松『櫻狩劍の本地』)と云うのであるが、北人神話「エツダ」(Edda)にもフレヤ(又は兄のフレイ)の劍も「自ら抜け出で、切り立てる」と云うてあつて、神功とフレヤと同じ人物であり、フレヤの日たる金曜日は神功の日たることが證明される。

此く七曜中の三日に配當される所の神々の名が、日本民族太古の天皇たる應神、仲哀、神功の三人であるに至つては、日本民族の偉大は知るべきである。

新羅(伊太利)征伐——此女帝の新羅征伐とは伊太利征伐の事で、決して今の極東の日本から朝鮮を征伐した事ではない。乃ち女帝は夫の君仲哀天皇と共に埃及南方カシから出立し、船で希臘に渡り、其れから伊太利を征伐し玉うたのである。伊太利を昔は *Sallia* (新羅)と云うたことは古代地圖を見れば直に知れる。そして其征伐記事の中に伊太利古代の國名が全部読み込みにしてあるが、悲しいことには日本には語學力の有る國學者が無いから、伊太利の諸國名と日本語とを對譯することを爲し得ない爲めに、此の大事の歴史地理が從來不明瞭となつて來たのである。且つ此時の新羅王の名が日本書紀に字流助・富利知干と云うてあるが、之れが伊太利古代タルクイヌス王朝の第三代の王 *Lysios Pissas* の事で、日本書紀にはルシオに只だ「ウ」音が付いて居る。

の相違(魯西亞をオロシヤと云ふの類)に過ぎず。日本古典の世界的確實を證明するものである。

皇后の西征は新羅征伐であつて、三韓は自ら別にある。韓とは *Gallia* 即ち *Galla* でアルプス山から佛蘭西一帶の古代名稱である。日本書紀が之れを明瞭にして(一)此自焔の韓(二)南の韓(三)谷那鐵の韓と云うて居る。此自焔の韓とは伊太利北部の *Cis-Po* 即ちポ河以内のガリヤであり、南の韓とはアルベス(アリヒシ)山の韓であり、谷那鐵の韓とは *Cognates* の韓で佛蘭西南部の *Vol-Kaic* (volk) の事で、羅典語と獨逸語の相違で地圖に出て居る。即ち「コグナテス」も「folk」も「同種族」を意味する名稱である。苟も言語學を知る者は、此事は承認せぬことは出来ない。又た比利辟中、文支、半古の諸邑も附屬したとの記事がある。其比利辟中はアルプス山國の *Widi* の事で發音で寫してある。文支とは *Squani* の意譯、半古とは *Acdun* の意譯である。

彼等新羅も三韓も乃ち——太古の伊太利も佛蘭西も日本に歸服して、新羅(伊太利)の如きは、「今より以後馬梳馬鞭を献せん。東日西より出で、阿利那禮川(ナベリス河)逆流すとも、春秋の朝を闕かば、天神地祇共に討ち玉へ」と誓ひ、三韓(佛蘭西)等は埃及日本を稱して「海東の貴國」或は「神國」と謂うて非常の尊敬と感謝の意を表したものである。皇后の伊太利征伐は、名は征伐と云ふけれども、一矢を放たず、一兵に血ぬらずして征服し玉うたのである。(日本の史家が書い

て居る朝鮮歴史などは全部盡くウツ歴史に過ぎぬ。) 此時の威光が歐羅巴人の頭腦に浸み込んでこゝに『ジンゴイズム (Jingoism)』即ち神功皇后主義の言葉が傳はつたものと思はれる。此通りに、神功皇后の事業は決して今の九州邊や朝鮮あたりをこせつき廻はつたものでなく實に世界の征伐である。然るに後世歴史家の無學と、現時研究力の薄弱の爲めに、此世界的の事業を極東の小せり合と解釋して居るは、祖先の偉大を辱かしめるものではないか。

## 二七 應神天皇埃及艦隊の編成

神功皇后の御子應神天皇は研究上埃及の有名な武勇の王ラムセス (宇治を意味す) 一世に當り、ヒクソス (天を意味す) 族の出である。埃及史には此天皇の時軍艦四百隻を亞拉比亞海に浮べたとある。是れは埃及艦隊の始めで、海上運動の盛であつたことを示して居る。日本書紀には五百隻の官船を造つて武庫の水門に集めたとあるが、武庫とは埃及ムスコ即ちスエズの亞拉比亞海の出口であつて、此兩記事は同じ事を謂うたものである。且つ應神天皇は八幡様で八幡船の起原は此にあり、太古の日本民族が天下の海洋を如何に横行したかを懐かしめるでは無いか。スカンデナ并ヤの海賊船等の間に Odin の神として武勇の模範として尊崇されたは即ち應神天皇のことである。

る。

既に海洋の征伐を企てる以上は地中海と亞拉比亞海との連絡を必要とする。ラムセス應神は、始め今のラムレー河を引いてナイル河に連絡し、是に由つて亞拉比亞海と地中海との水路を通じて居たのであるが、仁徳天皇の御世になつては一層航通に便利な大土木工事が起された——即ちスエズ運河の開通である。

## 二八 仁徳帝のスエズ運河開掘

世界に帝たり王たる者は教化もいる、武力もいる。然し又厚生利用、天下の利便も大に計らねばならぬ。仁徳天皇記事は埃及を中心として西は希臘、東は印度に地理が跨つて居る。蓋太古の植民關係と察せられる。

仁徳天皇が難波の堀江を掘り玉ふた事が歴史に甚だ大きく傳はつて居る。若し是れが今の大阪邊の溝掘りや河深え位ならば何等歴史に特筆大書するの價は無からうが、其特筆大書してあるには理由がある。仁徳天皇の時代には、東西の交通は盛に有つたものと思はれる(今の大阪難波には何等の關係もない)。此天皇の難波の堀江の開掘は實は埃及・難波のスエズの運河を開掘して、亞拉比亞海と地中海とを連絡したものである。スエズの名は日本ではスエツ (攝津) となつて居



る。古事記に「秦人を役して和珙の池を掘る」とあるが埃及史には「猶太人(秦人)を役して、コロコダイル(鱈)の池を掘る」とあるは、同じ事を言うたので此池の開掘がやがて運河の全通となるのである。時は埃及王セイトイ一世で、日本では仁德天皇を「聖帝」と云うてゐる。其高津の宮とは、運河南北端の中央のエル・ギスルの地——之れが高津を意味し、運河沿線中最も高臺の場所である。

### 二九 スエヅに仁德神宮を建設せよ

舊派史學の言ふやうに仁德天皇の難波堀江の開鑿は現大阪の淀河附近の溝掘り、川深へであるとしたら、何等言ふに足る事は無いが、スエヅ運河の開通に至つては、世界交通の大事件で其功績は偉大なものである。其後此運河は此地方の砂地の爲めに埋もれたが、其運河開通の第一計畫者、第一成功者であつた點に於ては、吾等日本民族たるものは此天皇の功業を頌讃せざるを得ない。近世佛國のレセツプの如きは、單に仁德天皇の事業を真似たばかりである。然るにレセツプの記念銅像は運河の北口ポート・サイドに見事に立てられて居るに係はらず、其第一著手者成功者たる仁德帝を表彰する所のものは、何等無いと云ふに至つては、日本人たる者として如何にも意氣地の無い事である。知らぬ内は是非もないが、一旦埃及に於ける仁德帝の事業の考證せられ

て明かになつた以上は、是非とも其地に仁德天皇の神宮を建てねばならぬと確信する。意ふに運河の中央部難波高津の宮址たるエル・ギスルの高臺に東西交通の船を見るやうな位置を選んで仁德神宮を建てたならば、庶幾くば、此聖帝の功業を記念すると同時に、日本民族太古の世界に施こした文明事業を萬國の民に知らしめる一助ともならうと思はれる。

### 三〇 日本民族の亞細亞東漸

明瞭に劃定することは出来ず、日本歴史の年表も取るに足らぬ、寧ろ無年代と見るが當然であるが、仁德天皇紀頃から日本の中心は東漸して印度緬甸へ來て居ることは古典に出て來る地理地名で知ることが出来る。山鹿素行が「人皇十七代(神功皇后も算して)までは悉く聖德の人君相續あり」と謂うて居るには見る所が有つたものと思はれる。

素より日本民族の中心が東漸する以前、別に高天原民族即ち梵天民族は印度方面へ東漸して居て、其所に大文明を作り、埃及、阿弗利加、希臘等とも交通があつた事は、日本歴史に據つても知ることが出来る。野馬臺の詩には、天孫民族が東海姫氏の國の名を以つてアルメニヤの天から波斯、メヂヤ、亞拉比亞方面から印度、錫蘭、緬甸、暹羅、東甫塞まで東漸する路筋が有りくと書いてあり、此詩の言ふ通り、姫氏國の民族は「本技天壤に沿く」である。

### 三二 太古日本民族の全世界踏破

日本民族太古の活動は實に雄大なものである。須佐之男命は近松の書物に據るとスサ即ち波斯方面から中央亞細亞、蒙古までも遍歴し玉うたことが云うてある——其れには十分の證據がある。此命は希臘神話にはスサの別名波斯を取つてベルセウスと謂うてある。日本の古典には傳へて無いが、希臘古典で補ふと、此神は太平洋即ち海原から、印度、亞拉比亞から歐羅巴を北へ貫き、スピツベルゲン、氷洲へ渡り、西南に向つて阿弗利加に行き、其れから大西洋を横ぎつて中央亞米利加の墨西哥まで、メツサの首取りに行かれたことが傳へられて居る。

天孫降臨の時出雲族を屈服せしめた建御雷神はスカンヂナ弁ヤの經典『エツダ』にはオーデンの子で、雷神トールとして傳へられ、其イオツンハイムの旅行なるものには西部亞細亞から中央亞細亞、西伯利まで遠征し玉うことが謂うてある。又希臘神話には經津主神と共にボラツクス(建御雷)とカストール(經津主)との雙生兒の神として傳へられ、ヤソンの鹿取り、香取りの亞米利加遠征——鹿島立ち——のアルゴ丸の守護神となつて居玉うた。

ベルセウスたる須佐之男命は西に向つて米國へ行き玉うたのだが、其後垂仁天皇の時田道間守が『印度日本』から東に向つて太平洋を横断して同じく中米墨西哥へ行き、歸航には濠洲へ廻り

タシマニヤ島を發見して命名した。タシマニヤ(Tasmania)とは田道間守の名である。此島の發見及び命名の西洋史は此歴史を改作した偽作に過ぎぬ。彼れが行た常世の(Tokyoio)國とは墨西哥一帯の總稱でメキシコは希臘語『石立たす、常世』を意味する國名である。

### 三三 中米ニカラガ運河計畫と中臣氏

希臘神話のヤソソ即ち中臣家の鹿取遠征の歸り途は、亞米利加西海岸を北へ上り、アラスカ、ベリリングの方へ來て樺太方面を南下して本國へ歸ることになつて居るが、其時彼等はニカラガ湖を見舞ひ、其地方を探検して太平洋側のサン・ファン河とニカラガ湖との關係を明瞭にし、此湖水の西の岸の太平洋側の短い間の低い土地を船を引きつゝてニカラガ湖に入つたが、將來ブリットの地點から運河を作る計畫で、其地に紀念の土を沈めたとの事が書いてある。然らばニカラガ運河は日本民族たる中臣氏が太古に計畫したもので、ニカラガ運河に由つて太平洋と大西洋とを連絡するの計畫が有つたことも明瞭に知られる。且又ヤソソガ鹿取の地たるメキシコから連れて歸へつたメヂヤ(Medea)姫なる女性の名は『中間』『中保』を意味し、是れは即ち中臣家の職掌語である。

### 三三三 ニカラガに中臣氏の紀念神殿を建設せよ

日本民族の太古に爲た事業は果して偉大ではなからうか。燕雀輩の日本歴史家等は與に大膽を語るに足らぬ。雄健偉大の學識と民族的抱負を持つ者は來れ。日本人は世界に雄飛し天下を經營することは天照大神からの大命である。吾等は今は極東の小島國に縮み込んで居る。然し祖先の偉業を紀念する爲めに——世界に恩澤を施したことを明瞭にする爲めに、前に言つた通り埃及スエズを吾等の西門として、スエズ運河の中央地に運河第一の著手者たる仁德帝を紀念する神殿を建て、又た東の門戸としては米國人のバナマ運河に對抗してニカラガ運河を開いたら面白いではないか、軍路上からも商業上からも——日本人の事業として、そして其太古以來のブリトの地に中臣氏の神社が建て度い。

### 三四 『亞米利加』の名稱は天ノ富ノ命の名に出づ

亞米利加の名稱は吾が天富命の名に出たなど云うと、今の萎縮病に取りつかれて居る國民や、無識病にかゝつて居る學者等は、又々たまげて仕舞うであらうが、何は何でも『アメリカ』とは『天富』を意味するのである。

神武天皇（日本年表は採用せず）の地理はバルカン、希臘方面にもあるが又た印度にもあるとは前に云つた事であるが、天富命も神武東征に前後して東國安房國へ行かれたので、其地は西南緬甸海岸 Chittagon 即ち『富』の地である。又た前に言つた希臘神話の中臣家ヤソンの亞米利加遠征も印度の此土地から出發するもので、此キッタゴン即ち富の地は亞米利加遠征の盡力者、又た出發點で、其出發地の祖先の名稱を遠征地或は發見地に命名するは自然のことである。

元來 America とは何を意味するか。西洋學者の中でも一人も説明し得る者が無い。其れはアメなる太古語が西洋方面に消えて仕舞うて、解することが出來ぬに由るのであるが、日本語ではアメは極めて明瞭で天である。『リカ』とは Rica = Rich 富を意味することは西洋語の方で明瞭である所から、此二つの語を合すと、アメ・リカは天富で何の不審もないではないか。

後世此太古の歴史を小説にして、天富命を天の屋利兵衛とし、中臣家ヤソンを忠臣藏として居る。西洋史でアメリカ命名に關係ある、アメリゴ・エスブツキの名は『天富・中臣』と對譯される。アメリカ發見者コロンボの名も亦『中臣』と翻譯されるのである。此事に關する舊來の世界歴史は此研究點から轉覆されるのである。

日本人たる者で、天ノ富命の名がアメリカとなつたこと位を知らぬやうなことでドウするものぞ、又た吾等の新研究に疑念を抱き、其大を驚いて腰を抜かすやうなケチな膽玉でどうするもの

ぞ。尙ほ日本には、日本人——天富命、中臣家の者等が何れの時かの太古に北亞米利加全部を探索した詳細の書物があるが、只だ從來の愚昧な歴史家等が其れを読み得なかつたのである。之に就ては他日發表する。

日本人の學問も見識も、何時までも斥鷃や、燕雀輩であることを許さぬ。太古の日本民族の祖先は世界的に偉大であつたが、今日の日本人は小島國的に萎縮して仕舞うた。

以上に説いた如く、日本古典は實に世界的——然り、全世界經營の精神を以つて活躍して居る。是れは我々祖先の理想であり、權利であり、又た實行であつた。是を思うと現時の日本の歴史家學者、政治家、青年等の意氣銷沈し、抱負縮小して居るには呆れざるを得ない。甚しいに至つては、自分等の無知無研究を思はずして、反つて吾々の博大なる新研究に對して嘲笑を試み、吾々を評して誇大など、言はうとすることで、彼等は實に我々民族の偉大なる祖先を辱かしめる者である。吾等は寧ろ進んで、今の亞米利加人等は吾等の祖先の亞米利加開拓に就いて、感謝を表すべきことを期するものである。

日本民族が此他尙ほ大に自覺せねばならぬ事がある——。

### 三五 列國治者の諸名稱と其格式

吾太古史の「國生み」神話は、全世界は高天原の所有であることを示して居る。即ち日本の祖先が開拓し、植民し教導したことを示して居る。世界の諸國名、諸地名、種族名なども亦高天原の派出であることは新研究の明かに知る所で、是等の内、既に高天原直系の日本が、全世界を統一し、其宗家たる資格あることを示めすものである。

世界統一を謂ふには、列國の治者と其國の資格とを明かにして置かねばならぬ。世界の治者には「イムペロル」即ち「命令者」なるものがあり其國をエムバイアと謂ひ、一般に帝國と譯して居る。是れは古代羅馬から始まつた名稱である。「キング」即ち王なるものがあり、其國を王國と謂ふ。「キング」とはアングロサクソン語では *King* と謂ひ、ゴス語では *Konigs* と謂ひ、日本語の君は即ちクン、或は日本書紀時代の「君」を *Konishi* と謂うたのは其れである。王とは「ワン」即ち「一」の事で「一人」と云ふに過ぎず、格式上の至大至高を意味せぬ。「スルタン」なるものがある。之れは保護者祝福者祝詞讀みを意味し、日本の權の守で土耳其などは權の守の格式の國である。「バジャ」なるもの、「シャ」なるものがある、之れはクシャツリヤ即ち印度に所謂刹利の事で將軍家に過ぎぬ、波斯王はシャである。「カイゼル」なるものがある。之れは「刀持ち」で矢張りスルタン、或はシャの階級に過ぎぬ、獨逸は其れである。「ツアー」なるものがある。之れは日本語の爺或はオヤカタなるもので千葉縣あたりの方言に「ツアー」なる語が残つて居て、年長

者の稱である。露西亞は其おやちの『ツァー』の國である(今は亡國)。

此に尙ほ一つ最も尊貴の治者がある。帝であり神子であり、其國を帝國と謂ひ、又た神國と謂ひ、其主長を稱してスベラミコト(Supera命)即ち至上至尊の御言、或は御神と謂ふのである——日本は即ち其れである。

此通りに治者の種々の名稱を研究して見ると、其内既に治者たるものゝ格式が定まつて居て、従つて其國の格式も定まつて居る。

其處でツァールのおやちの國や、刀持ちのカイゼルの國が最も上に立つべきものでなく、スルタンは權の守たるに過ぎず、キングは『君』或『クン』で、兎ても世界至上者たることは出來ず、只だエンペロールが稍世界治者中の最も高い格式となつて居るが、是れとても『命令者』と謂ふに止まつて、未だスベラ或は至尊など、謂ふことが出來ぬ。

後に残るは皇帝、或は神子——是れが最も高い格式の治者である。『帝』とは希臘語Theos、羅典語Deus『神』を意味して居るが、其神の中で最も高い神の位を承けて直系を引いて居る歴史を持つ皇室は何處であるか——日本の外にない。

### 三六 列國の格式を論定す——其一 西洋諸國

國の強弱貧富即ち權力と、其國の歴史的格式とは異うて居る。格式は歴史的に定まつて居る、強弱は時に變化がある。權力に由つて國を左右するを霸道と謂ひ、倫理的格式に由る者を正道と謂ふ。大義明分とは此事である、親も年取れば其力に於て子に劣る。然し子は親を輕んじ或は之れを虐待することは出來ぬ。正當の君主は厭までも君主である。世界の列國には富に於て、武力に於て盛大なるものがある、然し其盛大は必ずしも格式上、位の上のものとは謂へぬ。英國の如き海賊建國史を持つて居る國は如何に富強と雖世界の統一者たる格式があるとは謂へぬ。

獨逸は帝國と云ふけれども之れは自稱帝國で、實はホーヘンツォレルン侯爵家の借上に過ぎぬ侯爵即ちDukeの羅典語Duco 即ちCon-Duco 國造家である。若し國造家が皇帝など稱すとせば出雲の國造大國主がスベラ・ミコトを名乗ると同じことである。且つカイゼルとは『刀持』のことで、決してスベラ・ミコトでは無い。而も此頃瓦解滅亡した。

露國創建のルーリック家も、其次のロマノフ家でも何等格式ある家柄では無い。而も其王家は亡びた。——日本に敵する國は必ず亡びる。

北米合衆國は共和國、何等格式がありやうが無い。世界諸方から入り込んで來た人間の烏合の合衆に過ぎぬ。而も其母國たる英國に謀反して獨立した頃には、人道、自由、正義などを謂うて居たが、今日では人種の區別をしたり。モンロー主義なる不道理極まる事を言ふたり。有らゆる

非人道、不義不正、偽善の國となつた。コンナ國には何等の資格も與へることは出来ぬ。塊地利は帝國で羅馬帝國の後を承けたと云ふ事になつて聊か高い格式があるやうだが、之れも正統の系圖を引いたものでは無く、種々入り込んだ事情から其うなつて居るに過ぎぬ。又た若し古代の羅馬帝國に溯ると、此帝國とても、ユリウス・ケーザルのイムペラートル政治から來たもので、其帝を云ふは『命令者』と云ふに過ぎず、未だ世界統一の格式者とは云へぬ。——是れも此頃亡びた。

且つ一層羅馬の神話時代に溯ると、イナノ(Aeneas, Aeneas)王は此帝國の祖と云ふてあるが、イナノ王は神武天皇の御兄稻氷命で、其國は日本の支族である。神武天皇は末子であるが、當時は末子が相續をしたものゝやうで、此例は甚だ多い。又帝國の名の始まつたユリウス・ケーザル、及びオーグスス・ケーザル等はイウレ氏即ち磐余氏神武天皇の後裔であると稱して居たが、其家の系統は羅馬では絶えて居る。假令羅馬は帝國であつたとするも、スベラ・ミコトの國ではなく、神武天皇の直系を引いて居る太古の『希臘・日本』が宗家で、羅馬帝國は其分家の格である。

三毛入野命即ちミケイリノスが王であつた太古の埃及も日本の分家である。後代のプロレミイ王家は日本史上の山邊氏即ち鳥取氏に過ぎぬ(本牟知別王の條を見よ)。

現在の歐羅巴諸王國は皆羅馬帝國の瓦解の跡に建つたもので、帝國の稱號は尙ほ久しい間非常

に尊貴なものであつたが其れも追々其實を失ふと共に帝號も無意味のものとなり、各國皆借上して勝手に帝を稱し、帝國を名乗るやうになつて今日の歐羅巴の有様である。

其れ故に歐羅巴を統一するならば、其國は羅馬帝國の後を繼いだ現存國であるべきだが、其國と雖羅馬が日本の支族である以上は、若し世界統治の段となると日本の下に立たねばならぬ。

### 三七 其二 東 洋 諸 國

次に東洋諸國の格式を謂ふならば——

土耳其は古い建國では無いが、其民族は日本書紀にある崇神天皇の長子豊城命の後裔に當る者で、豊城の名は亞拉比亞のトエク(トエキは劍を意味し、土耳其は劍)の名に残つて居る。此皇子の妹に豊鋤入姫命がある。此二人は亞拉比亞土耳其民族及び太古の中央亞細亞のスキ・チャ(鋤・豊)民族の祖先である。豊城命の御兄活目命——亞拉比亞フェリクスが皇位を繼がれて埃及に都して居られた。さらば土耳其民族は豊城命の後裔たる以上は日本皇室の支族である。

纏向の日代の宮即ち埃及のヘリオポリスから日本武尊の征伐せられた東夷とは波斯以東の亞細亞全土を謂うたもので、是等の地は、太古の東、陸奥及び蝦夷である。

波斯は日本神話時代の須佐之男命(Susa-no)の國であり、其都をササ(須佐)と謂ひ、太古

日本の高天原とは兄弟の國であり、高天原の支族の國である。波斯の現王室は十六瓣の菊花紋章で日本皇室の御紋章と全く同一であるのは、素より歴史上の關係がある。要するに今は「シャール」の國、權の守の國である以上は其格式も知る可きである。

印度は亡んで居る。言ふべきことはない、然し此地は日本人の東漸の途中、最も長く居た所で新研究者たる吾々に取つては、實に惜しい／＼國である。此土地を英國が蠶食して治めて居るのは残念と謂はねばならぬ。

支那は最も古い歴史を有つて居るが、是れは現支那に於ける歴史ではなく、長久の年月間にバビロニヤ、埃及方面から東漸し、段々に歴史を積み重ねて續て來たのであるが、後代になつて色々の、素性の知れぬ者が權力に由つて王となり、歴代の王朝を作つて來たので、殊に現代では民國であるからは、太初の格式は勿論之を失ふて居る。——是れも日本に敵した爲めに滅亡の運に陥つた——凡て日本に敵する者は滅ぶのである。

暹羅、東甫塞等は日本太古史上東の最東端の國で、垂仁天皇の皇子本牟知別王が行かれた出雲の國なるもので、其サイゴン(羅典語サゴ即ち物言ふ意味す)は此皇子の「真言問ひ」の地であり其檳榔の宮はメナム河のアユチャの舊名 Agimathia で、此地は萬葉及伊勢物語には「武藏野に占肩燒き」「武藏野は今日はな燒きそ」の地である。又其アユチャは日本書紀には尾張(終り—ワケ)

Ind)の吾湯市の邑とある。然らば是等の諸國も日本の舊領地であつたことは明瞭である。山田長政の事は暹羅の歴史にはケファロニヤの希臘人コンスタンチン・ファルコンとある。之れは「長崎仁左衛門」を意味する名である。日本人は又た希臘系統だからである。

太平洋諸島は太古に天孫民族が西方から開拓殖民したものである。中央亞米利加メキシコの如きは垂仁天皇の時田道間守の行た常世の國である。メキシコは常世を意味し、日本の三宅ミヤケと同語(Mexicoは希臘語 Meko Make Makeke(三宅)で、墨西哥は三宅氏の國であり、田道守は三宅氏の祖である。オ、ストラリヤの東南にタシマ・ニヤ島があるは、田道間・守が常世から歸航の時立寄つた地で、彼れの名を負うたものである。又た太平洋諸島も「皆日本の内なれば」の語が馬琴「弓張月」に出て居る。此他南米の北部は「萬葉集」の歌に由つて國名が命名されて居るのを知るは新研究の愉快な結果である。又た太古日本民族が北米今の合衆國、加奈陀等を探検した大事件を最も詳細に傳へられた不思議のものもあるが、今日其事の説明は略して置く。

### 三八 日本帝國の格式

東洋西洋の重要な諸王及び諸國の格式は大抵以上に説いた通りであるが。残る一國——日本はどうであるか、前にも言ふた如く、日本古典自身の言ふ如く、之に加ふるに又た世界諸國の傳説

史類文學等の傍證に由つて、日本は世界最古の國であり、高天原の直系であり、或は長年月間に時に記録を缺いて居る部分もあるやうだが、萬世一系の確信ある皇室を戴き、其治者の稱號はスベラ・ミコト、至上至尊の命令、御言、御神で古典などでは天皇を現神、遠つ神など謂うて居る。殊にアルメニヤ、メヂヤ即ち高天原記事に關して詳細の太古を傳へて居るのは、古事記、日本紀で、是等は實に世界無比の經典と謂ふ可く、其經典を持傳へて居る日本民族が、高天原の直系を名乗るは當然である。高天原の事に關しては印度のリグ・エダにも聊か出て居るが簡略なもので、到底日本古典の詳細なのに比較すべくも無い。耶蘇教の舊約書の始めにも少しばかりは出て居るが、日本古典程委しくない。支那古典には甚だしい。日本古典が高天原——アルメニヤ、メヂヤ、ゴマルを最も詳細に傳へて居るのは、其本源たる神の國を、最も善く紀念して居るものと謂はねばならぬ。是に由つても日本國の格式が至上至貴のものであり、又我國が世界最古の統治者であり、世界の大宗家であることを證することが出来る。況や、前にも言ふた如く、全世界諸地方は高天原の神々の「國生み」した所、開拓、經營、植民し造り固めた所で、全世界は始めから高天原のものであつたのであるに於てをや。

茲に一つ研究者の見落すことの出来ぬ一民族がある——猶太民族が其れである。

猶太民族は今土地もない、政府もない、兵力もない、只だ民族があるばかりで、而も世界に

散在寄寓して居る。然し彼等には堅い信仰があつて、天の選ばれた民である。其民族の内から何時か大英傑が起つて其民族を統一し、其宗教の力に由つて世界を統一する時があると信じ、頑として動かない。所が此民族の文學及び歴史に就て比較研究をすると、彼等は太古のパピロニヤ出雲系の民族で、日本人が尙ほ西部亞細亞即ち波斯パピロニヤに居つた時代には或は同棲し、或は近隣に居たのである。殊に日本古典仁德帝の埃及時代には、彼等は秦人(Chinamen)の名を以つて日本に歸化し、日本に事へて居たことは明瞭に書いてある。されば日本古典と猶太の舊約書とは非常な密接な關係があつて、彼等は今こそ不遇の民族で、世界に於て寧ろ虐待せられて居るが、太古の親しみから考へると、日本民族に取つては決して路傍の人ではない。そして彼等が天の選民と云ふ觀念や、世界統一の思想を有つて居るのは、彼等が太古西方日本民族に接觸して居た時分に、日本から得た思想と察せられる。其故に彼等の文學には日本古典と同じ言語や、文句が甚だ多くあり、又た日本神典祝詞の重要な思想を、言語文句其まゝ、彼等の文學中に取り入れて居る事は明瞭以上明瞭な事である。

然し猶太人の歴史は大觀上ダ非デ(大國王)の系統を引いて居て、出雲族であり、日本の支族であるは明瞭であるから、彼等は日本に對しては如何ともすることが出来ぬ。

されば世界の諸民族諸王國に對しては、我日本は大宗家で大義名分を明かにする以上は、世界



の宗家たる格式は日本之を有するのみである。

### 三九 日本は世界諸宗教の宗源

政治上から全世界に於ける日本の格式は之を論じたが、教學上からはどうか。高天原は此問題に於ても矢張世界の先輩であり大宗家であり、宗教方面から世界統一を企てるならば高天原は其統一者である。

世界の大宗教はバラモン教、猶太教、ゾロアストル教、佛教、耶穌教及びマホメット教であるが、是等も皆高天原から出て、高天原に學び高天原を中心として居るのは新研究の愉快な発見である。

(一) 波羅門教——は梵天教即ち高天原に出た教であるは説明を要せぬ。此教學の高尙な進歩はエライもので、宗教及び哲學に於ては是以上のものは後世出ることが出来ぬ。佛教は世界最大の宗教であるが、其根源と本體とは盡く婆羅門教の作り直し、或は布衍に過ぎぬものである。

(二) 猶太教——はモーゼの組織したもので、モーゼは彼等の書物に謂うてある如き傳記の人物ではなく、實は彼等が景行天皇と、日本武尊とを併せて之を一人として改作したもので、埃及史に據ると、猶太人が埃及に歸化して居た時分に、ヘリオポリス即ち日代の宮の祭司たるモイゼスなる者が猶太人を保護し、法律を與へ、最後に猶太國を建設せしめたものとある。所が此モイゼスは、

景行天皇と日本武尊とのことである——日本武尊は比較研究上希臘神話のアポロンの神即ちミューズの首領「ムサゲテ」(水揚げ)なるもので、ミューズがモイゼス或はモーゼスとなつたのである。そしてモーゼスは「水から取り揚げられた」と舊約書に謂うてある。然らば猶太教及び猶太國は纏向の日代宮の景行天皇及び其皇太子日本武尊の創め玉ふた所で、猶太人に取つては日本には大恩がある。

(三) 佛教——の開祖釋迦なる人物は、從來印度に生れた人間、佛教は印度に起つた宗教と信じて居るが、多くの材料と嚴密な地理の新研究に據ると、印度は單に後代佛教の傳道地で、彼れは——若し實在的人間とするなれば——其生れた所の加比羅衛とは埃及カイロ、其修業地の檀特山の阿羅々仙人は、高天原たるアルメニヤのアララット山、其下山して行た佛陀伽耶は古代パピロニアのブツラ、其説教地は地中海の猶太、王舎城はエルサルムである。其最後の大陸行たるクシナガラの旅は埃及から阿弗利加をナイル河に沿うて溯り、コンゴ河に沿うて下る事。入滅の沙羅双樹はコンゴ(金剛。恆河と譯す)河の太平洋に注ぐ河口ポーマで、彼れの一生は印度には毫毛だにも關係はない。故に印度の佛蹟なるものは皆後世の偽物だから、盡く不明瞭である。此事は他日別に詳論をすることとして此には略して置く。

所が釋迦なる人物は實在的ではなく、梵天民族の植民教化運動の順序を人化して、釋迦傳とし

たもので、彼が阿羅々仙人に學び、佛陀伽耶に來たと云ふとは、埃及はバビロニヤの殖民地であり、其指導をアララット山(阿羅々仙人)のあるアルメニヤたる高天原に仰いで居たことを示めすもので、高天原は釋迦の教師、指導者であつたのである。

アルメニヤの梵天民族(バンと稱す)は後に東方カスピ海とアラル海との間に發展して、此地に『バン』即ち梵、謠曲『翁』の地が出來た。其謠曲には『あれはなぞの小冠者ぞや、釋迦牟尼佛の小冠者ぞや。生れし所は刀利天、育つ所は鼻(翁の地)が……』とあるは佛敎史研究の重要な材料で日本文學の貴重なることが察せられる——釋迦牟尼佛の小冠者を敎育したものは日本の『翁』である。釋迦は佛陀伽耶で成道したと謂うてあるが、眞の佛陀伽耶たるバビロニヤのブッスラは日本歴史の大國主神の出雲(Edom)の事で高天原——アルメニヤ及びミチアの治下に過ぎぬ。且つ此地は日本の天孫降臨の地(出雲であり、又た筑紫の稱がある)である。且つ釋迦族は婆羅門族でなく、刹利族で、高天原族(梵天族)の家柄とは一段次ぎである。さらば佛敎から云ふても高天原の敎は宗家の敎で、日本民族に對しては佛敎は日本敎の上に立つて之を統一の治下に置くことは出來ぬ。況や佛敎の大部分は高天原敎即ちバラモン敎の改作たるに於てをやである。

又た最も注意すべき事は釋迦は彌陀佛を説いて居る。彌陀とはミチヤ國(Melias-Mela)の事で日本の高皇產靈神の事であり、——釋迦自身すら、世界の人間をして日本の神を尊崇し彌陀の淨土たる高天原に歸向せしめて居る事である。是を觀ても高天原の尊貴は一層明かではないか。そして、ミダの國及びアルメニヤには高天原たる神の國がある。耶蘇敎の所謂エデンの樂園の地理も全く是れである。

(四)耶蘇敎——の起つた地は一切の舊説は誤つて居て、決して地中海岸のバレスチナの猶太ではなく、實は波斯バビロニヤの地であることは新研究の證明する所である。

勿論耶蘇なる人間は無い人間であるが、其所謂耶蘇の降誕なるものは、日本天孫彦番能邇々藝命の降臨史の剽竊改作で、此に耶蘇神子論が出來る。若夫れ耶蘇は彦番能・邇々藝命の改作である以上は、耶蘇敎は到底邇々藝命の後裔たる皇室を戴く日本に對して頭の上りやうが無い。(釋迦なる語も新研究上、邇々藝命の御名的一部分たる『天津日高』を意味する名で、是れ亦天孫關係に出た名稱と謂はねばならぬ)。西洋の會堂に、耶蘇の小兒時代の像と謂ふバムビノと云ふものがある。此像の胸には菊花紋章が有り、之れに附屬して十字架がある。之れには新研究上面白い歴史と意味とが有るが略して置いて、日本の紋章たる菊花と十字架との親密な關係が有ることは察せられるでないか。

又た耶蘇紀元(前四年或は五年)とは、天照大御神(即ち彦番能邇々藝命に宿り玉へる神鏡)が伊勢に鎮座し玉うた紀元即ち垂仁天皇の二十五年に當る事件の年を採用したもので、耶蘇紀元とは

伊勢紀元である。然し此伊勢とは現日本ではなく、アススリヤのニネベ方面の事であることを一言注意して置く。

(五)マホメツト教——は亞拉比亞あたりに古から種々の教理及び太古の日本民族の歴史等がコボして残して居たものを拾ひ集めて、世界の大宗教の最も後に出たものである。拾ひ集めだから其教理は極めて貧弱、何等の哲學もなく、宗教らしいものもなく、倫理上の教義も少く、又た歴史の宗教の格式などは少しもない。且つ教祖と稱するマホメツトなる者も實在人間が編纂的に製造された人間か不明であるが、其性格中には提婆達多もあり、日本古典の日本武尊もあり、本牟知別王もあり、譽田天皇もあり、殊に本牟知別王及び譽田天皇の名は發音の同じ點から考へてマホメツトと縁がありはせぬかと思はれる。又吾崇神天皇の名を御・間城入彦と云ひ、其間城なる語は即ち *Muke* とマホメツトの都たる *Mekka* (希臘語 *Make, Mecca*) と同語であり、又崇神の名は亞拉比亞西北部 *Nuzim* の地名に遺つて居るに見ても、マホメツト史傳が日本太古史から系統を引いて居ることが察せられる。然し日本の年表は一種の或ものだから其まゝに採用することが出来ぬことを一言注意して置く。又最も注意すべきことは、マホメツト紀元たるヘジラなるものは遷化或は避遁を意味し、我厩戸・聖徳太子の遷化の年なるものと同じである(年表上一年の差があるが年表製作上の何かの行違であらう)ことだが、是には日本歴史とマホメツト教との關係が有

ること、察せられる。且つマホメツトの一族にオムマヤド (*Ommayyad*) 族があるは、我厩戸皇子と縁戚であることは愈々明瞭となつて来る。此に於て此教理が日本に對して如何なる關係にあるかは自ら明瞭になる。——親密ではあるが日本の上に立つことは出来ぬ。

又た面白い事は天孫彦番能邇々藝命の名も(厩戸生れ)を意味し、厩戸皇子は素より厩戸で生れたりとあり、耶蘇も厩戸で生れ、マホメツトも語原上厩戸 (*Mahommed* < *Ma-Omma-iad*) を意味する事であり、そしてマホメツトの紀元が吾厩戸皇子の遷化の年であるのは、研究者たるものは、慧眼を以て事物の裏面にまで徹底した考察を進めねばならぬ事である。

以上説いた通り世界の大宗教に對して新研究を加へて見ると其等は盡く高天原から出たもの、高天原に教育せられたもの、又高天原の神々及び天孫を崇敬し、之を中心として歸向するもので、我日本帝國は其高天原の正系であるが故に、一切の宗教は「日本」なるものに歸せらるべきは當然であり日本は之を統一すべき資格がある。

#### 四〇 神道を世界教に還原するを要す

然し是れに對しては日本の神道家や國學者たるものは、活眼を開いて、日本古典の大研究新研究に基づき、——今まで極東島國日本の古典と思ふて縮小してあつたものは、實は大世界的のも

のたることを覺り、小乗日本主義を棄て、大乘日本主義となり、神道及び國典を大世界化即ち大世界的の真相に還原して、其解釋を新にし雄大にせねばならぬ。若し其うするならば神道は世界的神道となり、全世界に傳道することも出来るが、然らざるに於ては神道は自然に立枯れせねばならぬ。

若し新研究の言うが如く、神道や國典が世界的に還原せられるならば、日本及び日本民族は世界に於ける光榮を増すと同時に、神道もいや榮えに榮えることは鏡にかけて見る如くである。若し之れが出来ぬならば、神道及び國學者等は矢張り亡國教徒と言はねばならぬ。神道は偉大である、國學は諸學術の冠弁であるが、神道家、國學者は、今日のまゝでは、とても話にならぬ。吾輩は國家、民族、及び人類の爲めに、彼等の覺醒して神道を世界教とすることを希望する。

以上論じ來た通り、日本の『國生み』神話の點から、世界開拓教化の點から、日本民族太古の世界的活動の點から、世界列國の治者格式の比較點から、又た宗教上の點から日本が世界を神政に統一するは當然の事で、又た是れは天祖の意志である。

#### 四一 人類福祉上の功績

世界諸國家の格式から云ふも、世界諸宗教の本末から云うも、日本は實に最第一の格式を有す

る皇室を戴き、諸宗教中の宗家たることは以上に論じた如くであるが、若し夫れ其等格式や本来を問はぬこととして、日本が世界人類の福祉を理想とし、其れに向つて努力して來たことは非常のもので、今と雖其理想は昔のまゝである。

天祖天照大御神は世界を統一し『天の下四方の國を安らげく治ろし召さん』とするのが精神であり、天孫を地上に降し、天國を地上に建設するの精神は其れで、天孫彥穗能邇々藝命の御名が『天邇藝志、國邇藝志、天津日高』と謂うは、前にも云うた如く、天には光榮、地には泰平、人には恵みを意味するので、耶蘇降誕史は其れから作り更えられてある。

神武天皇の東遷は、世界には皇化に洽はぬものが有つて、『邑に君あり、村に長あり、以つて相凌轢して居る』——其れを平定して、全世界を平和にせうと云うが大精神で、此に世界の平和的統一の思想が十分に見られる。寧ろ神武天皇の精神では全世界の國疆を徹廢して天下を神政に一統し度い考へであつたと察せられる——世界聯盟などは遠くの昔に神武天皇の理想とし玉うた所である。其れに何ぞやアメリカあたりから事新しそうに唱へ出すが如きは、世界が日本歴史に如何に無知であるかに驚かざるを得ない。又た日本の外交家等の國史の無學と無精神には一層に驚かざるを得ないのである。

崇神天皇が天皇たるの天職を謂うて、是れ『豈一身の爲めならんや、天下を経綸し神人を司牧

するにあり」との大詔を發し玉ひ、天皇自ら「牧司」を以つて任じ玉ひ、希臘埃及方面から天下四方に宣教四道將軍を發して、平和と榮えの教理を宣傳せしめ玉ひ、宣教師なるもの、起原を爲し玉うことを見よ。後代耶蘇教の宣教師は全く此精神と事業との變化發達したものに過ぎぬ。

景行天皇、日本武尊の精神も事業も、亦天下の教化であつて、甘言美辭を以つて天下を教化せよ、只だ命に服せぬ者のみを兵力を以て膺らしめ玉うたに過ぎぬ。

仁徳天皇の民本主義は有名な事であり、又た東西洋交通の爲めに、スエツ（攝津）の運河を開掘せしめ玉うた如き、世界を利益した偉大なものである。

此他日本民族祖先の豪邁なものが太古に全世界の海陸を踏破した如きは、皆探検、開拓、交通、教化、祖先の光榮の念に出たもので、一として人類の平和と福祉との精神でないものはない。

殊に日本の皇室で尊信し玉う所の「宮中八神」なるものは皆これ産靈の神々で、産靈とは希臘に所謂ミューズ(Muses)の神々で(Muses)であり、文學、學術、美術、農工等一切平和の技術の神々である。

全世界で、現在に於てミューズの神々を國家的に祭り、尊信する王家、帝室、國家が希臘の太古以來、他に果して有るか否か、之を考へたならば、「日本」なるものの真相は思ひ半に過ぎるものがあらう。

世に汚隆ないでない、民族元氣の消長もないでない。然し、吾皇室も、國家も、國民も此精神は今も祖先から傳へて有して居る。此祖先と此歴史とを有する民族に對して全世界は十分の感謝の意を表し、其光榮を認めるは當然である。

かの世界聯盟説の如きは、吾天照大御神の「天の下を總ね」天の下四方の國を安らげく平けく治ろし召さんとし玉うた所の大精神に對しては、尙ほ低級の一階段たるに過ぎぬ。

されば若し世界の人類感が一層に熟して來、又た世界各國が日本古來の大理想を解し、又た其太古以來の盡力を感謝するならば、一旦國際聯盟——尙ほ進んで世界各國及び諸民族の大和合が成る時には、日本は其最も古き、最初の提案者として又た長い實行者として世界の最高權威の位置に在るが當然である。そして此事は日本人が先づ自覺し、尙ほ進んで全世界に堂々と教へねばならぬ。

#### 四二 世界人類に關する學問上の中心——日本

前來說明した如く、日本民族は高天原以來連続した歴史を有する世界太古の民族で、太古以來蓄積した知識を有ち得る民族であり、とても歐米人の如き新參者に比較すべきでない。歐米人は現時物質文明に聊か一日の長はあると雖も、人類の文明に關した知識に至つては、凡て東洋諸民

族が卒先したもので、日本、支那、印度等に其等の知識は蓄藏してある。歐羅巴太古の文明なるものも實は東洋の移植或は翻譯に過ぎぬので、希臘のホメーロスの詩も、ローマのイナヒ傳の如きも盡く東洋事變を西に移したに過ぎぬ。哲學に於てもソークラテース前の諸哲學者も、實に希臘人ではなく印度哲學を希臘語で傳へたに過ぎぬ。ソークラテース、プラトーンの如きも實は印度哲學を彼れに持ち傳へたもので後世之れに偽作物を附け加へて希臘のものらしく爲たのである。降つて近世になつても、かのシエクスペアの『ハムレット』の如きも、『ロメオ・ジュリエット』の如きも皆日本、印度、支那に傳はつた材料を彼れに持ち傳へて改作したのである。ゲーテの『ファウスト』も、印度哲學の眞如の光明と無明の雲・惡魔の思想に過ぎず、バイロンの『マンフレッド』はバビロニヤ波斯の天文神話の材料の西に傳はつたもので、其中に日本の神々もある。彼れの『海賊』は日本印度の松浦佐用姫、藤原純友、毛利元就傳を合併して改作したものである。セルワンテスの『ドン・キホーテ』は佐野源左衛門常世及び竹取翁たる讃岐の造麿に種々の事變を附着せしめたものである。彼れのアルファベットの文字は日本の片假名と同じもの、彼れの人事上の知識は大抵東洋から傳はつたものである。

此う謂ふ事は西洋人等の夢にも知らぬ所である。其他支那印度の古典等には又た太古以來の無量の知識を蓄へて居て、是等は凡て日本人ばかり、其寶藏を開く鍵を有つて居るが、日本以外の

人民の如何とも爲し得ぬ所である。何故ならば、日本の高天原以の知識——傳説、歴史、事物、言語は殆ど太古以來のものを傳へて居て、而も依然として生きて居る、世界の古語は、國に由つて死語となつて居るものがあるが、日本に在つては、太古語は現在語であり、太古の習慣は現在の習慣であり、太古の傳説は今も尙ほ忘られずに存して居て、人類世界の太古以來の大知識を活きたまゝ傳へて居るからである。現日本の僻陬たる吾郷國伊豫の宇和島に於て、舊約書にあるダビデがゴリアテを殺した譚が童謡として今も存在し、パッカス教徒の『ヨウホイ』の歌もあり、又たヤソンの遠征譚が今も歌はれて居ると言ふたならば、世界の人等は驚き入る事であらうが、實際存して居るから此事實は否むことが出来ぬ。

西洋人等は人類文明に於ては、東洋人に對しては甚だ新參者である、其れ故に東洋の大知識を知らぬ。又た十分理解することが出来ぬ。此點に於ては日本人は最も都合よき位置に在るもので、支那でも印度でも盡く之を解し、西洋の如きは尙ほ一層容易に之を解し得る者であるから、東西古今を融合して、世界の文明を大成さす者は、實に唯一の日本民族あるばかりである。

さらば、全世界の學問知識を集合し、之を大成せしむる中心は又た日本であつて、其大任は日本民族のものであらねばならぬ。

## 四三 結 論

日本<sup>の</sup>國體<sup>の</sup>尊貴<sup>な</sup>ことは、以上<sup>の</sup>如く<sup>も</sup>根本<sup>的</sup>に大研究<sup>を</sup>せぬ<sup>以上</sup>は、決して其<sup>の</sup>真相<sup>を</sup>知るとは出来ぬ。舊來<sup>の</sup>國史家<sup>國學者</sup>などの如き<sup>も</sup>狹隘<sup>な</sup>頭腦<sup>で</sup>は徒に世界<sup>の</sup>笑<sup>を</sup>招く<sup>のみ</sup>に過ぎぬ。又た此<sup>を</sup>研究<sup>して</sup>來ると國典<sup>の</sup>世界<sup>的</sup>の大寶典<sup>たる</sup>光輝<sup>が</sup>出る。是<sup>れ</sup>でない<sup>以上</sup>は國典<sup>は</sup>單に日本國人間<sup>に</sup>のみ「一人好がり」の材料<sup>たる</sup>に止まり、我國體<sup>の</sup>尊貴<sup>は</sup>、何等<sup>の</sup>世界<sup>の</sup>人に關せず焉<sup>とし</sup>て取扱はれる<sup>に</sup>過ぎぬこととなり、我國體<sup>の</sup>尊貴<sup>を</sup>説き、萬世<sup>一系</sup>の皇室<sup>を</sup>誇らうが、神國<sup>を</sup>名乗らうが、世界<sup>の</sup>人類<sup>は</sup>「其は我關する所に非ず、我に取つては何等<sup>の</sup>尊貴<sup>の</sup>理由<sup>を</sup>有せず焉」として取扱はれる<sup>に</sup>過ぎぬ。然し吾等<sup>の</sup>新研究<sup>、</sup>大研究<sup>を</sup>以つてする時は、皇國<sup>の</sup>理想<sup>、</sup>民族<sup>祖先</sup>の偉業<sup>は</sup>、盡く世界<sup>的</sup>の價値<sup>あり</sup>、人類<sup>全體</sup>の恩<sup>と</sup>すべき所<sup>で</sup>、此<sup>に</sup>始めて我國體<sup>の</sup>世界<sup>的</sup>の尊貴<sup>の</sup>基礎<sup>があり</sup>、其<sup>れ</sup>を繼承<sup>する</sup>我等<sup>は</sup>、又其<sup>の</sup>光榮<sup>に</sup>浴する<sup>ものである</sup>。

然しながら世界<sup>的</sup>の政治上<sup>の</sup>の經綸<sup>に</sup>於て、宗教<sup>に</sup>於て、學問<sup>に</sup>於て萬國<sup>を</sup>統合<sup>し</sup>、日本<sup>を</sup>して其中心<sup>たらしめる</sup>の事業<sup>は</sup>非常<sup>の</sup>なこと<sup>で</sup>、日本<sup>民族</sup>に取つては、實に其<sup>の</sup>任重く、其<sup>の</sup>路遠いと謂はねばならぬ。此<sup>に</sup>於て「士は以つて剛毅<sup>ならざる</sup>可からず」の語<sup>は</sup>日本<sup>民族</sup>の心懸<sup>であらねばならぬ</sup>。

然るに日本人<sup>の</sup>現狀<sup>は</sup>どうか。甚だ吾等<sup>の</sup>意<sup>に</sup>満たぬ<sup>ものである</sup>。日本<sup>の</sup>學者<sup>は</sup>民族<sup>に</sup>就て遠大<sup>の</sup>研究<sup>を</sup>爲て居らず、又た爲ようとせず、舊來<sup>の</sup>姑息<sup>な</sup>、鎖國<sup>的</sup>の頭腦<sup>を</sup>以て兒戯<sup>に</sup>類した事<sup>を</sup>言論<sup>する</sup>に止まり、祖先<sup>の</sup>世界<sup>的</sup>の大理想<sup>の</sup>如きは夢<sup>に</sup>だに知らぬ。會々<sup>先覺者</sup>を以つて任ずる吾等<sup>が</sup>彼等<sup>に</sup>誨へても、彼等<sup>の</sup>無知<sup>と</sup>頑冥<sup>性</sup>とは、却つて吾等<sup>を</sup>笑ふと謂ふ有様<sup>である</sup>。コナナ事<sup>では</sup>現在<sup>及び</sup>將來<sup>の</sup>日本人<sup>は</sup>祖先<sup>を</sup>辱しめる者<sup>と</sup>謂はねばならぬ。既に相當<sup>の</sup>位置<sup>を得</sup>て居るもの等は、其一<sup>資半給</sup>に満足<sup>して</sup>優懦<sup>安逸</sup>を貪り、又た何等<sup>の</sup>民族<sup>の</sup>發展<sup>など</sup>に意<sup>を</sup>致す者はなく、現代<sup>の</sup>青年<sup>は</sup>只だ小い一身<sup>の</sup>欲情<sup>とか</sup>我儘<sup>とか</sup>戀愛<sup>とか</sup>、三モン文學<sup>を</sup>云々<sup>すること</sup>等は出來るが、其<sup>の</sup>思想<sup>に</sup>於て行爲<sup>に</sup>於て、殆ど盡くデカダンの柔弱<sup>腐敗</sup>、有爲<sup>の</sup>氣象<sup>などは</sup>少しもなく、日本<sup>自身</sup>を知らず、東洋<sup>知識</sup>の大寶庫<sup>を開く</sup>の見識<sup>もなく</sup>、淺近<sup>易解</sup>の西洋<sup>輸入</sup>の愚にも付かぬ思想<sup>や</sup>文學<sup>に</sup>心酔<sup>して</sup>浮萍<sup>の</sup>如く、弱々しい言語<sup>や</sup>文體<sup>を</sup>學んで其<sup>の</sup>銳氣<sup>を</sup>失うて居る。女子<sup>は</sup>女子<sup>で</sup>裝飾<sup>虚榮</sup>の無知<sup>無識</sup>の動物<sup>と</sup>成り了つて、宛然<sup>賣女</sup>の如く、新聞<sup>雜誌</sup>等<sup>の</sup>煽動<sup>に乗</sup>せられて、其<sup>の</sup>材料<sup>となり</sup>、不知<sup>不識</sup>玩弄<sup>物</sup>と爲つて居ることを悟らず、社會<sup>及び</sup>國家<sup>組織</sup>等<sup>の</sup>思想<sup>は</sup>殆どなく、民族<sup>的</sup>の考へ<sup>の</sup>如き<sup>も</sup>勿論<sup>なく</sup>、日本<sup>女性</sup>の典型<sup>たる</sup>天照<sup>大御神</sup>や、神功<sup>皇后</sup>や、齊明<sup>女帝</sup>に倣はうと云ふ如き<sup>も</sup>女性<sup>は</sup>到底<sup>發見</sup>されぬ。

日本<sup>今日</sup>の上下<sup>男女</sup>が此<sup>う</sup>云ふ有様<sup>では</sup>、天照<sup>大御神</sup>の大理想<sup>や</sup>、神武<sup>天皇</sup>の雄圖<sup>を</sup>繼紹<sup>する</sup>

ことは甚だ難しい。吾等は單に列國に伍すると云ふ如き考へでは祖先を辱しめることであることを常に念頭に置かねばならぬ。今日の日本は時利あらずして、一時極東の小島國に縮んで居るものであることを思はねばならぬ。然し永久に縮んで居ることは許るさなない。

現時の日本人は萎縮の極で、國土は小さく、智識は狭く、抱負は小さく、奮闘進取の氣は乏しく、現在の日本人は世界に於て最も耻づべき位置に居る。之を悟らずして、支那や露西亞を相手にして小勝利を得、獨領の粟粒程の南洋の地を占取して得々として、僅かに列國に仲間入りして大喜で居るなど、實に儉安姑息、小成に安んずるの甚しいには驚かざるを得ない。教育家に人物なく、政治界に大抱負ある者は一人もなく、其れで果して祖先の徳と競ふことが出来るか。

吾輩は斷言する——日本人が、今説いたやふな真正の歴史的智識を有たぬ以上は、文部省や教育家等が國體を口にせうが、敬神愛國を言はうが、其内容は空虚と誤謬で國民は何とも思はず、馬耳東風に終り、決し大抱負は起らず、日本は勃興することは出来ぬ。今日の急務は日本人に此真正の歴史的知識を興へるにある。此智識は思想を生み、思想は抱負を生む。知識は活動の母である。日本國若し大に興らうとするならば、日本祖先の雄圖の歴史を常に念頭に置くことを要する。

日本民族祖先の雄圖終

オカシクテ

新史學後援會々員名簿

大正八年三月

(アイウエ)

特別賛助員及び特別會員

- 東京府下。澁橋町成子 (醫學士)
- 東京芝區高輪南町
- 東京麹町區永田町一 (千代田通信社長)
- 東京牛込區早稲田鷓鴣町 改或館
- 大阪西區松島町一丁目 (鏡商)
- 東京府澁谷町廣尾八八 (鑛山業)
- 東京小石川區雜司ヶ谷町一〇八 (文學士)
- 東京京橋區桶町十五 (大鏡閣理事)
- 東京麹町區下六番町五十一 (實業家)
- 東京府澁谷町下澁谷一七九九
- 東京四谷區右京町 (朝鮮京城日報社長)
- 東京本郷區森川町一 (鐵道院)
- 東京本郷區森川町一 (音楽家)
- 北米合衆國カリフォルニア州ホリウード。ブイン街一三三一
- 東京本郷區弓町一丁目二五

- 青木今朝雄氏
- 岩崎輝彌氏
- 井原豊作氏
- 上田務氏
- 宇野源三野氏
- 岡上麟藏氏
- 大町桂月氏
- 面家莊吉氏
- 加賀豊三郎氏
- 笠井彰氏
- 加藤房藏氏
- 金井彦三郎氏
- 金子眞成氏
- 茅原茂氏

- 東京本郷區丸山町四番地 (銀行家)
- 東京牛込區市ヶ谷山伏町二一 (出版業)
- 東京府千駄ヶ谷町九九八 (記者)
- 東京府下荏原郡大井町一八六
- 東京麻布區谷町五六 (出版業)
- 東京神田區表神保町八番地
- 宮城縣仙臺市東八番町一五四
- 東京府下澁橋町柏木 (時事新報記者)
- 東京府下澁橋町柏木 (時事新報記者)
- 香川縣大川郡引田町 (前貴族院議員)
- 東京京橋區山城町一五
- 東京麹町區有樂町三ノ一 (タクシー自働車會社事務取締)
- 東京麹町區丸ノ内 (仁壽生命保險會社長)
- 東京府下。澁橋町柏木一四二
- 東京府東大久保十四
- 廣島市鐵砲町一三二 (陸軍少將)
- 東京芝區南佐久間町二ノ十四 (愛商會會主)

- 菊池綾五郎氏
- 久能 仂氏
- 小杉清 壹氏
- 小杉關 三氏
- 小泉準 一氏
- 後藤商 店氏
- 齋藤 宏氏
- 坂本嘉治 馬氏
- 櫻井徹 吉氏
- 佐野新 平氏
- 芝 染太 郎氏
- 柴山 安氏
- 下郷傳 平氏
- 染谷秀 貞氏
- 竹越與三 郎氏
- 谷田繁太 郎氏
- 中川傳 三氏



東京芝區白金今里町九六(新時代社長)  
 東京府南葛飾郡龜戸町東洋モスリン會社(技師長)  
 香川縣高松中學校(教育家)  
 東京麻布區芥町一(實業家)  
 岐阜縣惠那郡岩村町(銀行家)  
 東京赤坂區田町七ノ三  
 佐賀縣佐賀市妙安寺小路二二九(農學士)  
 東京日本橋區本町三丁目(金港堂取締役)  
 東京麹町區下六番町十六  
 東京京橋區築地三丁目一(法學士)  
 東京小石川區音羽町九丁目二二  
 東京京橋區尾張町(天下茶屋)  
 東京麹町區下六番町十六(學習院學士)  
 東京小石川區林町七〇(人體ラヂウム研究者)  
 神戸海邊通六丁目八番地(南洋興業株式會社理事)  
 東京四谷區傳馬町新二丁目二三木村方(教育家)  
 東京下澁谷六一八(常盤松女學校長)  
 東京芝區二本榎町西ノ二(工學士)  
 神奈川縣鎌倉(工學士)  
 東京芝區高輪南町(醫學士)

杉中種吉氏  
 永井米藏氏  
 二宮百松氏  
 二宮類治氏  
 長谷川九一郎氏  
 林田龜太郎氏  
 原澄次氏  
 原安太郎氏  
 比企間新造氏  
 菱沼理弍氏  
 福味文卿氏  
 松永敏太郎氏  
 松宮春一郎氏  
 松本道別氏  
 松本正純氏  
 三木春雄氏  
 三角錫子氏  
 三角愛三氏  
 三角謙三氏  
 三角康正氏

北海道根室根室牧場(牧場長)  
 東京芝區西久保廣町(時事新報記者)  
 廣島字品運輸部本部(海軍少佐)  
 東京芝區白金臺町一ノ七一(實業家)  
 東京府荏原郡新井宿(相互保險會社々長)  
 東京府下澁谷一四五六(郵船會社)  
 東京本郷區湯島新花町一〇五(南洋貿易)  
 東京荏原郡大井町一一九三(教育家)  
 東京府下。大久保百人町二五七(海軍家)

維持會員

近江湖雄三氏  
 青池晃太郎氏  
 井家忠雄氏  
 市原鷲頭氏  
 伊藤龜介氏  
 牛丸潤亮氏  
 小田律氏  
 大迫純秀氏  
 大谷保氏

福岡縣箱崎町宮ノ前佐々木真(醫學士)  
 福岡縣福岡市東職人町二一平原方(銀行家)  
 東京府下。中野町字大塚一七八二(文學家)  
 大分縣大分市中島浦  
 東京府澁橋角管十二社(文學家)  
 東京府澁橋角管十二社(女流作家)  
 東京府大久保百人町三二九(畫家)  
 東京府大久保百人町三二九(女流作家)  
 東京京橋區三十間堀三(日本魂社長)  
 東京府下。澁谷三八八(歷史家)  
 東京府千駄ヶ谷町六八三(文學家)  
 愛媛縣伊豫國八幡濱町(醫)  
 東京府下。戸塚町上戸塚九五三(文學家)  
 東京日本區榎正町九(實業家)  
 東京府下。戸塚町觀音一七九(文學家)  
 淺草聖天町四二  
 東京府下代々木山谷一六八(教育家)  
 東京牛込區河田町十二(畫家)  
 東京本郷區湯島新花町九八(畫家)  
 東京商船學校練習船大成丸(運轉士)

北海道根室根室牧場(牧場長)  
 東京芝區西久保廣町(時事新報記者)  
 廣島字品運輸部本部(海軍少佐)  
 東京芝區白金臺町一ノ七一(實業家)  
 東京府荏原郡新井宿(相互保險會社々長)  
 東京府下澁谷一四五六(郵船會社)  
 東京本郷區湯島新花町一〇五(南洋貿易)  
 東京荏原郡大井町一一九三(教育家)  
 東京府下。大久保百人町二五七(海軍家)

研究會員

山本平氏  
 山下義子氏  
 山崎嘉夫氏  
 山崎みづ子氏  
 相澤熙氏  
 會津八一氏  
 相原熊太郎氏  
 秋元祝之氏  
 秋山金八氏  
 安藤源之助氏  
 石川保之助氏  
 市原壯太郎氏  
 稻澤謙一氏  
 今井猶三氏  
 宇佐美景堂氏  
 梅津連氏  
 浦和四郎氏  
 江川芳光氏

仙臺市小田原町金剛院内(教育家)  
 大阪天王寺村阿部野南和岡十一號  
 東京牛込區早稻田鶴登町二二二  
 東京麹町區飯田町四ノ二  
 仙臺市東七番町廿七  
 東京小石川區小日向同心町二十五  
 東京小石川區林町九五(萬朝報記者)  
 新潟縣越後國中蒲原郡龜田町裏町  
 福井縣三方郡山東村北田  
 奈良市餅飯股町十六(畫家)  
 北海道札幌區山鼻町一〇二八ノ二  
 東京牛込區大塚町四ノ四八號  
 靜岡縣駿東郡富士岡村神山  
 和歌山縣和歌山市金龍寺町四  
 兵庫縣印旛郡的形村  
 秋田縣南秋田郡寺内村  
 東京小石川區西九町十九樂島氏方  
 東京下谷區谷中清水町十二  
 大阪市北區東野田町一三三四  
 東京府下大崎町谷山二二八

岡崎 榮松氏  
 小笠原 久恒氏  
 小形 安治氏  
 大石 正平氏  
 大内 俊亮氏  
 大河内 泰二郎氏  
 大久保 八朔氏  
 大野 邦平氏  
 大道 宗吉氏  
 大村 長府氏  
 笠原 恭太氏  
 加藤 知正氏  
 勝又 公胤氏  
 川村 徹介氏  
 神榮 宣郷氏  
 龜井 謙造氏  
 川村 玄洗氏  
 北田 朝三氏  
 栗原 佐氏  
 桑門 藻太郎氏

東京府下中野町上ノ町七六〇  
 東京淺草聖天町五八(時事新報記者)  
 兵庫縣有馬郡八多村柳谷  
 大阪府三島郡春日村字倍賀  
 北海道後志國古平町  
 靜岡縣沼津町旭町四四一  
 東京本所區林町一(機械材料商)  
 和歌山市外岡町(東部小學校)  
 愛知縣名古屋市西區廣匠町三ノ五(國華教育社内)  
 長崎縣長崎市長崎馬場一三五  
 東京小石川區戶崎町十二  
 鳥取縣氣高郡鹿野町  
 宮城縣加美郡中新田町  
 支那長沙日清汽船會社  
 茨城縣新治郡高濱町藤田運送店  
 市外戶塚町諏訪一七八  
 支那青島濟南陸軍無線通信所  
 臺灣西螺公學校  
 東京京橋區築地一ノ一九  
 東京淺草區北清島町七五(讀賣新聞記者)

小寺 芳次郎氏  
 後藤 武男氏  
 小西 康太郎氏  
 駒井 毅氏  
 近藤 清吉氏  
 齋藤 重德氏  
 齋藤 千代吉氏  
 阪上 經章氏  
 佐々木 愛子氏  
 佐藤 多猛氏  
 佐藤 秀雄氏  
 佐々木 久光氏  
 佐々木 惣助氏  
 佐々木 武藏氏  
 澤井 脩道氏  
 杉山 義夫氏  
 鈴木 貞一氏  
 關 菊治郎氏  
 關口 賢太郎氏  
 高木 富五郎氏

東京芝區琴平町八  
 東京麹町區飯田町六丁目二十四番地  
 東京市外濠橋町角管六六六(衆議院書記官)  
 東京日本橋區馬喰町二ノ一  
 朝鮮平安南道龍岡  
 東京本郷區高砂町三八  
 東京小石川區茗荷谷町九十五  
 東京麹町區五番町十八(日吉館)  
 朝鮮全羅北道南原郡廳  
 北海道余市町大町大川町六二  
 東京京橋區三十間堀(日之出生命保險會社)  
 東京赤坂區溜池(黒龍會)  
 東京高等師範學校  
 東京赤坂區福首町一(黒田侯爵邸内)  
 北海道渡島國厚澤村大字館村  
 東京府下澁谷廣尾町八八  
 千葉縣夷隅郡大原町  
 東京府下高田村旭出四三  
 北海道石狩國空知郡瀧川町  
 東京府千駄ヶ谷町六三六

高倉 忍氏  
 瀧野 覺氏  
 田口 弼一氏  
 高野 英一郎氏  
 竹中 勇氏  
 帶刀 治人氏  
 田中 貢太郎氏  
 田宮 時應氏  
 陣内 不可止氏  
 出崎 石松氏  
 友岡 泰氏  
 長崎 武氏  
 中島 信虎氏  
 中島 利一郎氏  
 長澤 子妙氏  
 中川 宗一氏  
 中村 一六氏  
 二宮 榮春氏  
 中谷 英男氏  
 西川 權氏

東京府下戶塚五九七(改明館)  
 滋賀縣犬上郡河瀬村大字犬方利七方  
 東京本郷區追分町三十一(富士見軒本店)  
 東京赤坂區一ツ木町  
 三原縣阿山郡稻田村  
 朝鮮應尚道北道盈德法院支廳  
 東京麻布區新龍土町六  
 東京小石川區雜司ヶ谷町六九  
 兵庫縣出石郡神樂村役場  
 東京府代々木一四  
 東京府東鴨村宮仲二一九〇  
 東京本郷區森川町一番地  
 仙臺市陸軍衛戍病院長  
 朝鮮京城府南山京城神社内  
 東京芝區伊皿子町二十四  
 橫濱市月岡町一ノ九  
 東京四谷區田町三十九  
 東京京橋區銀座(國光生命保險會社)  
 東京赤坂區田町  
 富山縣高岡市新橫町若森仙吉方

納武 津氏  
 野瀬 貞一氏  
 野村 秀雄氏  
 萩森 莊太郎氏  
 服部 三衛氏  
 林 金吾氏  
 林 健太郎氏  
 平野 千代子氏  
 平尾 學治郎氏  
 福迫 龜太郎氏  
 藤川 淡水氏  
 藤澤 術彦氏  
 細矢 權吉氏  
 堀川 吉久氏  
 牧野 貞亮氏  
 增田 五郎氏  
 町田 仙藏氏  
 松田 修藏氏  
 牧野 義平氏  
 松野 仁左衛門氏

書叢 集募員會 家國

# 興亡史論

東京本郷區神明町四一七(中外商業新聞記者)  
 東京本郷區森川町一。新坂四三〇號  
 東京澁谷六一八(三角錫方)  
 岡山市下田町四五  
 千葉縣山武郡成東町成東中學校  
 東京小石川區音羽町九丁目藤谷方  
 大阪市西區報上通一ノ一七四  
 支那長沙  
 臺灣臺北書院街六ノ三一  
 東京神田區南甲賀町八(明倫館)  
 東京本郷區金助町四七(枹木館)  
 東京本郷區根津八重垣町三八  
 東京市外。上澁谷四三  
 大阪府堺市櫛屋町東三町三  
 東京府下。淀橋町角管六六四(舊案)  
 大阪北區紅梅町柳筋  
 東京小石川區原町十三  
 東京牛込區北町三二  
 東京神田區南甲賀町(明倫館)

松田 禎輔氏  
 宮原 民平氏  
 三好 武雄氏  
 三好 梧一氏  
 前島 成氏  
 三宅 武郎氏  
 三宅 吉之助氏  
 宮下 三夫氏  
 望月 恒造氏  
 八島 榮二氏  
 山崎 維城氏  
 山田 紫山氏  
 山田 新吾氏  
 山本 景武氏  
 吉田 收氏  
 渡邊 哲洲氏  
 渡邊 龜三氏  
 渡川 成文氏  
 井上 茂氏

次編 豫告

南太平洋の开拓者 鎮西八郎爲朝

今號(第八編)に限り 定價五十錢 送料四錢

毎月一回發行豫定——正價、前金〇一冊三拾錢〇五冊一圓五十錢  
 〇十冊三圓——〇郵税一冊二錢(但後援會員に限り、日本郵便領  
 内、郵税免除)

大正八年九月十一日印刷  
 大正八年九月十五日發行

著者兼 發行所 木村 鷹 太 郎  
 東京市下谷區入谷町三九六番地  
 印刷所 金山 佐 次  
 東京市下谷區入谷町三九六番地  
 印刷所 博真堂印刷所

發行所 東京市外。戸塚町諏訪一七九番地  
 日本民族協會  
 振替口座東京六九七〇

哲人曰く歴史は繰返すと、又曰く盛衰の理は天命なりと云ふと雖豈人事に非ざらんやと。本叢書は成これ、國家民族の興亡盛衰を尋究し一代の思想感情を傾動せる不朽の傑著、其燦爛たる光輝は百世に傳り、潑刺たる生氣は千古に盡さざるべし。本會既に本叢書第一期の發行を完成し、今や第二期の配本を始む。速に預約申込を勸む——刊行書目左の如し。

刊行書目

▲近代建國史(アリアマス) ▲印度史觀(スミス教授)  
 ▲政治哲學(アリストテレス) ▲海戰史論(ダリウ海軍中將)  
 ▲支那近世思想(顧、黃、王) ▲立國教育論(フイエ教授) ▲君主經國策批判(フレデリック大王)

編輯顧問及翻譯者

八博士 數學士  
 ●須竹雄 ●阿部次郎 ●井上忻治 ●有島生馬 ●時野谷常三郎 ●池田俊彦 ●中村孝 ●山中謙二 ●原藤國  
 ●岡下大慈 ●齋藤茂 ●田邊尚雄 ●入谷智定 ●常田宗七 ●加藤政司郎 ●松宮春一郎

會費

甲種 一時拂金廿七圓五十錢也前納  
 乙種 毎月會費二圓五十錢入會金二圓  
 五十錢前納(但最終會費に充つ)

刊行

●四月より毎月一巻刊行●五百頁  
 内外●全十二卷●四六列洋裝九  
 イント印刷

木村鷹太郎氏新譯

## アリストテレス政治哲學

本叢書第二期の第一巻なり

著者は希臘太古に在つて當時の世界一切の知識を一身に具せしアリストテレス。譯者は希臘に關して通達の土木村鷹太郎氏。本書は世界に於ける組織的政治學の嚆矢なり。

發行所

東京市麴町區下六番町十六番地

興亡史論刊行會

振替東京三七八二七

木村鷹太郎氏譯

# バイロン傑作集

○定價金 三圓  
○送料金 八錢  
○日本民族協會員に限り 金二圓

△現時文壇の淺薄無氣力にして腐爛、不潔、人情を險惡ならしむる以外、何等の美なく大きな煩瑣時代に當りて——世界の**大天才**たり、**火山**の如き**雷霆**の如き、而も**義俠**の詩人**バイロン**の傑作集出づ。譯者は『日本バイロン』の稱ある木村鷹太郎氏。

△**自然美**の叙述はバイロンの靈筆、目見る如きの思ひ有らしむ——伊太利の黄昏。希臘海洋の金波。ラインの岸。アルプスの高峰幽谷。瑞西の湖畔等全歐羅巴の景色美は皆バイロンの詩境なり。此**自然美**中に活躍せしむる——

△**男性**は**鐵石の頭腦**、**烈火の胸**、**獨立不羈**而も又た古武士の如き、**男の中の男**を以つてす此男性美に配する——

△**女性**此は**端正貞婉**、**百合の如き**あり、**妖艶美麗**、**薔薇の花**の如きあり。或は時に**熱情夜叉**の如き人を以つてす。

△**本書收むる所は**●バイロン聊詳傳●『海賊』●**艶美の悲劇**『**パルシナ**』●**孤獨厭世**『**マンフレッド**』●**汗血千里**『**マゼツバ**』●**宇宙人生の神秘哲學**を教ふる**天魔の弟子**『**カイン**』●**附録**として著者の評論——●**バイロンの『天地觀』**●**サルダナバルス大王の『快樂主義』**●**バイロンの『女性及び戀愛觀』**等を添ふ。

△尚ほ著者の友人十六名家の書翰『**バイロン**』と**木村觀**』は巻頭にあり——●**戸川秋骨氏**●**大町桂月氏**●**岩野泡鳴氏**●**松崎天民氏**●**尾島菊子女史**●**酒巻鶴公氏**●**筑紫次郎氏**●**清水樵村氏**●**加藤朝島氏**●**上田黒湖氏**●**松本道別氏**●**茅原茂氏**●**三島錫子女史**●**栗島狭衣氏**●**奥野野實氏**●**奥野野晶子女史**

發行所 東京市麻布區谷町五十六番地

内外出版協會  
日本民族協會  
振替東京三三五九〇番

取次

(8)

The Monthly Pamphlet of Japanology—

—Grounded upon the new investigation of the Japanese, as a race which originated in Armenia, Asia Minor, and expanded and migrated westward, and eastward, and at last settled in the present island Japan.

BY

**T. KIMURA.**

AUTHOR OF—'The Antique History of Japan—or the Japanese as a Greco-Latino—Egyptian Race' in two volumes, 'The History of Oriental Ethics', 'Shakespear's Hamlet, a mere Compilation of the Oriental materials', etc.  
 TRANSLATOR OF—'The Dialogues of Plato' in five volumes, Xenophon's 'Memorabilia', Aristoteles' 'Politics', Byron's 'Corsair', 'Cain', 'Mazeppa' 'Manfred', etc.

The Grand Achievements by the Japanese Ancestors,  
 on the Globe.

Part I.

1. What is the Japanese Empire for ?
2. The new investigation in Japanese Sacred Books and classics.
3. The Japanese Classics rightly claim the international value.
4. Let the dead classical school of Motoori bury its dead.
5. The Sintoists and the Japanologists of the old schools are treacherous to Japan.
6. All the World owes to the Japanese ancestors.
7. The Tri-Divine-Government of the antique Japan.
8. The Peaceful Unificator of the World—The Goddess Amatelas (Athena), the founder of the Japanese Empire.
9. "Thy Kingdom Come".—The descending of the Heavenly Son—identified to be Jesus Christ—in the ancient Persia and Babylonia.
10. The Antique Japan in Greece and Africa.
11. The expansion of the Heavenly Works by the first Emperor Dimmu (Jimmu—the Galli family)
12. The Eastern movement of the Emperor Dimmu from Senegal of Africa to Greece—"Sola-mitu-Jamato" (Sol+mitis), the other name of Japan—equivalent to the "Hellenes" (Helios, lenis) the Greeks.
13. The Japanese dynasties in the antique Rome and Egypt.
14. "Akitu-sima-Iamato", the ther name of Japan—that is the Balkan States.
15. The Relation between Greece and the later Egypt in the Japanese history.
16. The first Missionaries for the World—fron Egypt-Japan.
17. The encauragement of the study in astronomy and geography in Egypt-Japan:—Aristarchos, Hipparchos, and Ptolemy described in the Japanese history.

18. Alexandria of Egypt, the Metropolis of the Emperor Suzin = (Mi-maki-ili-Hiko < Mi-Make-el-echo.)
19. Naming "Macedonia" (Make-done,) after the name of the Emperor Suzin (Mi-Make-el-hiko)

Part II.

20. The Emperor Osiro-wake (=Osiris < Osiro-is) in Heliopolis, Egypt-Japan.
21. The expedition of Asia by the Prince Iamato-dake 'he and Alexander the Great, are related and identified in many points.)
22. Some accounts on Alexander the Great appeared in the Japanese history.
23. Alexander, the worshipper of the Goddess Amatelas (Athena);—the Emperor Suzin the god-father of Alexander, in the Temple of Ammon.
24. The Longitude and Latitude invented by the Emperor Jōmu in the antique Africa-Japan.
25. Making of Africa.
26. The Queen Jingō and "Jingoism".
27. The first formation of the Egyptian Fleet by the Emperor Ōdin (identified to be Ramses II of Egypt.)
28. The first opening of the Suez Canal, by the Emperor Nint ku (identified to be Seti I of Egypt.)
29. The memorial Temple of the Emperor Nintoku to be built, by the Japanese, on the Suez Canal.
30. The gradual migration of the Japanese toward Asia.
31. The expedition over all the World by the antique Japanese.
32. The Plan of the Nicaragua Canal of America by Nakatomi (meaning "Colo-ombo" or 'Jason") Family in the olden times.
33. The memorial Temple of the Nakatomi Family, be erected by the Japanese, in Nicaragua.
34. The name "America" (Ame-rica = Heaven + rich) originate from the name of the ancient Japanese Ame-no-Tomi (= Heaven + rich)—the story of Amerigo Vespucci, another form of the Japanese traditions; (that of Columbus the same.)
35. The Ranks of all the Kingdoms in the World. (36,37,38)
39. Japan as the centre of learnings concerning antiquities and all the religions. (40,41,42)
43. Conclusion.

---

THE NIPPON MINZOKU-KYŌKWAI

179 Suwa, Totuka-mati, Tokyō, Japan.

Price 40. Sen.

終